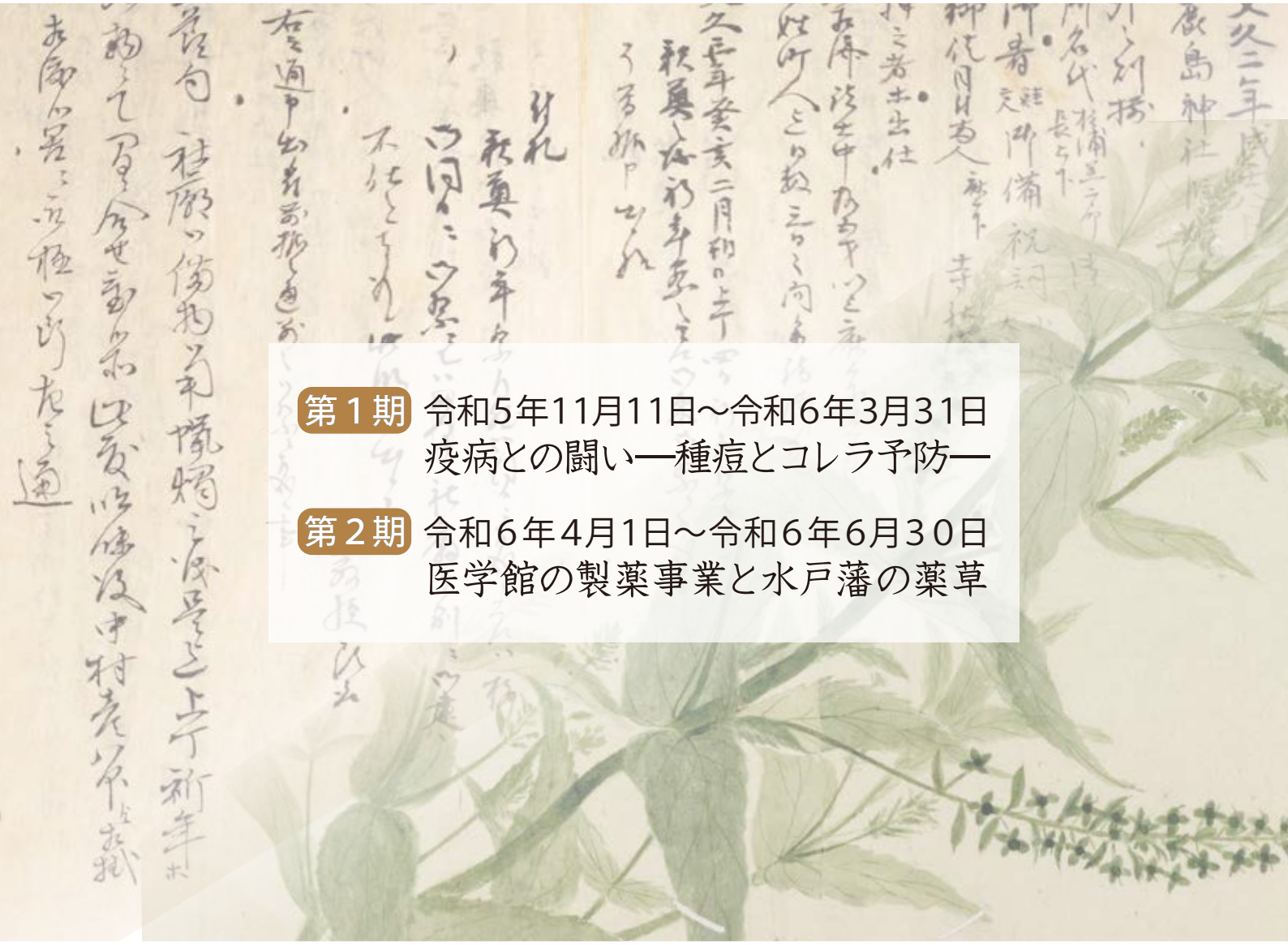
医学館開設 180 年記念

水戸藩の医学と弘道館医学館

本冊子は令和５年11月11日から令和６年６月30日まで弘道館展示室にて行われた特別展「医学館開設１８０年記念 水戸藩の医学と弘道館医学館」の展示パネルを元に再構成したものです。

弘道館医学館について広く知って頂くためのものであり、非営利目的、個人の範疇でご利用ください。本冊子の内容を元にした出版や複製の制作・配布などをお考えの場合には、弘道館事務所までご相談ください。



第１期 令和5年11月11日～令和6年3月31日
疫病との闘い―種痘とコレラ予防―

第２期 令和６年４月1日～令和６年６月３０日
医学館の製薬事業と水戸藩の薬草

茨城県水戸土木事務所 偕楽園公園課
弘道館事務所

〒310-0011 水戸市三の丸 1-6-29
☎029(231)4725 ✉kodokan@pref.ibraki.lg.jp
https://kodokan-ibaraki.jp/

はじめに

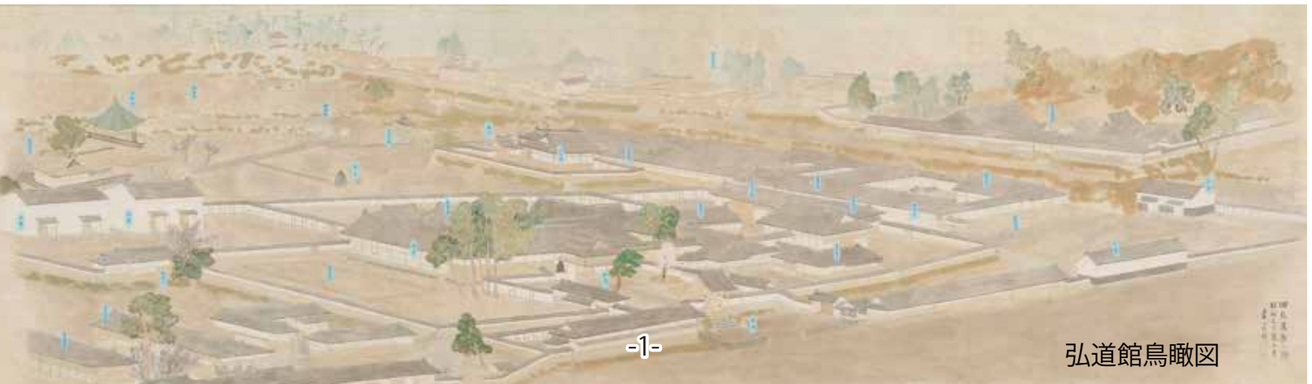
水戸藩の医学は、2代藩主徳川光圀の奨励によって盛んになり、その後、藩医原南陽の実証的医学の導入によって大きな進歩をとげました。

9代藩主徳川斉昭は、水戸藩の医学の成果をさらに発展させ、藩校弘道館に医学館を設け、藩内の医学教育・医療機関のセンターとしました。医学館は、当時大流行した痘瘡（天然痘）から領民を救うための種痘の実施においても中心的な役割を果たします。

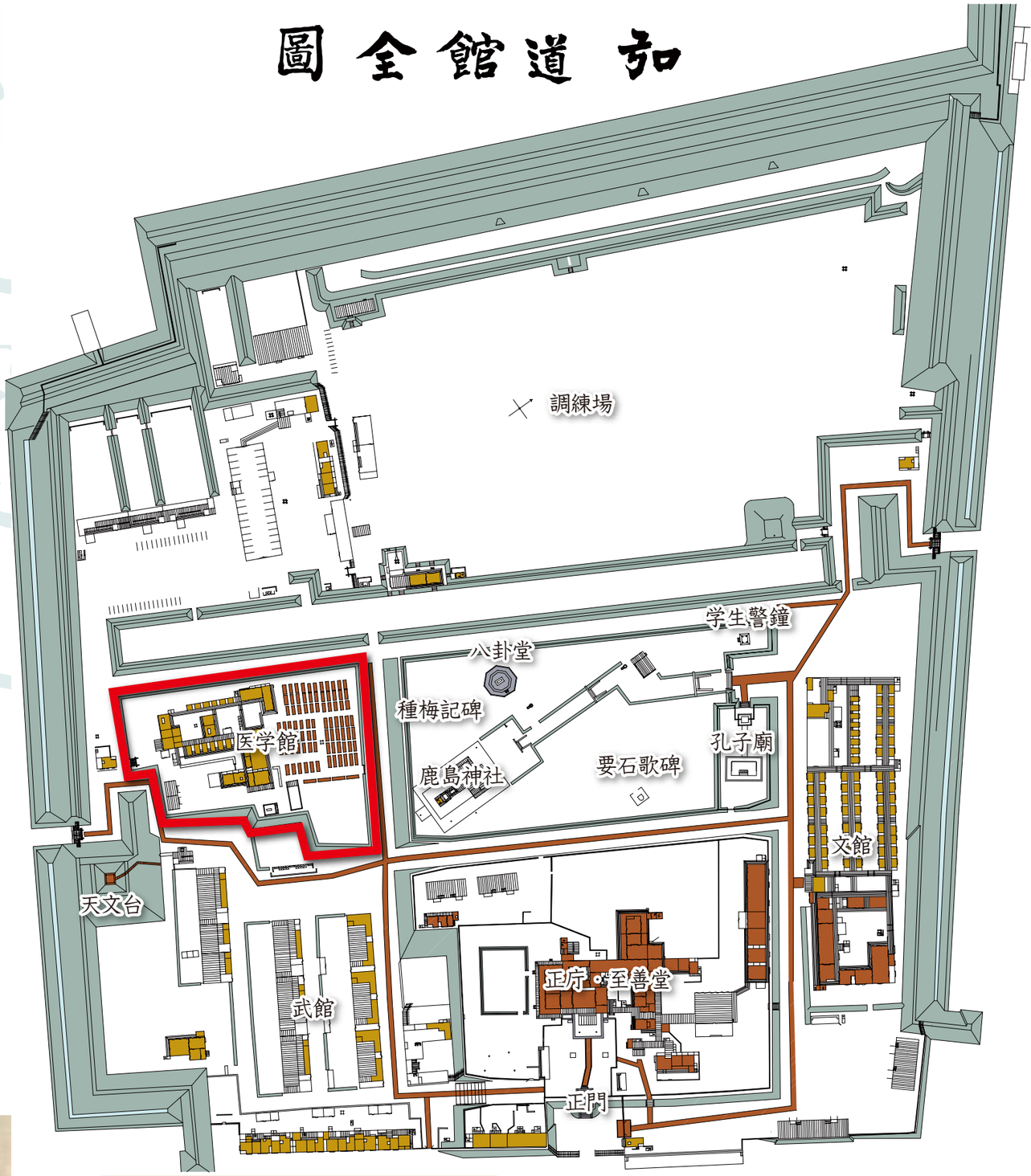
この企画展は、令和5年(2023)が天保14年(1843)の医学館開設から180年にあたることを記念し、水戸藩の医学の歴史や弘道館医学館の活動を紹介するものです。人間の生命にとって最も重要な医学・医療に尽力した藩主や藩医、町医、郷医たちの姿を、資料をとおしてご覧いただけましたら幸いです。

弘道館の創設

水戸藩9代藩主徳川斉昭は、藩政改革の重要施策として藩校建設に力を注ぎ、天保9年(1838)に建学精神を示した「弘道館記」を自らの名で公表しました。天保10年には弘道館の敷地を水戸城内三の丸に定め、翌年から建設に着手、天保12年7月に主な建物が完成し、8月1日に仮開館しました。その後、天保14年に医学館が開設されるなど、施設や学則などの制度が整備され、安政4年(1857)5月9日に本開館の日を迎えます。この日、本開館で最も重要な弘道館内鹿島神社への鹿島神宮からの祭神の分祀と、孔子廟への孔子神位の安置の儀式が執り行われました。



弘道館鳥瞰図



弘道館全図にみる医学館の位置

弘道館は敷地面積が約3万2000坪で国内最大規模の藩校でした。敷地内には、文館・武館をはじめ、医学館・天文台・調練場などがあり、現代の総合大学のような教育施設でした。

弘道館の設計は斉昭が自ら指示しています。弘道館全図を見ると、医学館は敷地中央の南側にあり、この位置からも斉昭が医学館を重視していたことがわかります。

水戸藩の医学関連年表

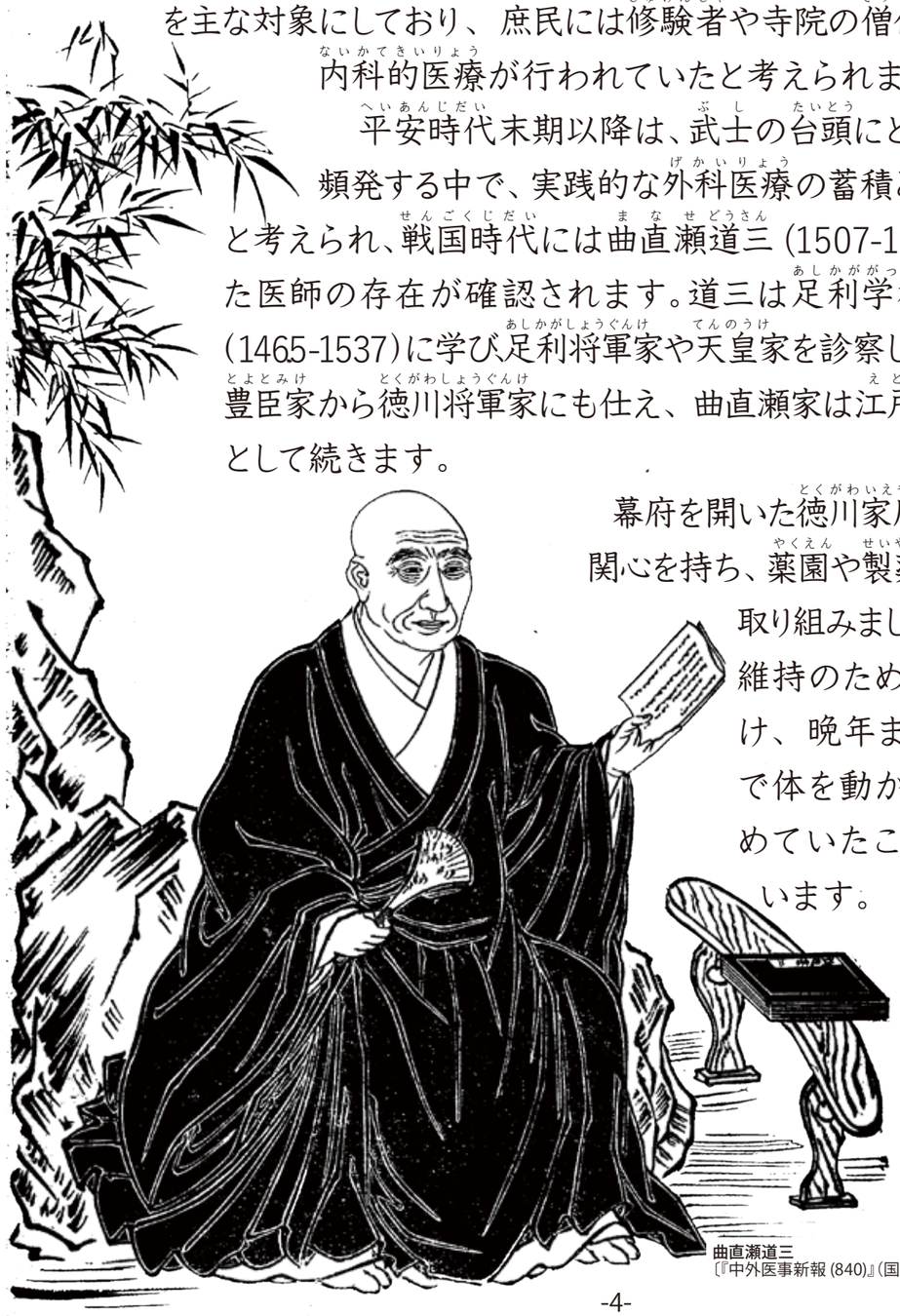
和暦	西暦	事　　項
寛文元	1661	徳川光圀が水戸藩２代藩主となる
延宝６	1678	光圀が筑間玄述を長崎に派遣して和蘭医方を学ばせる
元禄６	1693	光圀の命で鈴木宗与が『救民妙薬』を出版する
宝暦４	1754	山脇東洋が刑死人の解剖を実施、同９年解剖記録『蔵志』を出版する
安永３	1774	杉田玄白・前野良沢らが『解体新書』を出版する 原南陽が西遊し、山脇東門・賀川玄廸に学び、実証的医学に接する
天明７	1787	原南陽が水戸藩の侍医となる
寛政７	1795	緒方春朔が人痘種痘書『種痘必順辨』を出版する
	1796	ジェンナーが牛痘による天然痘予防法に成功する
寛政 11	1799	佐藤中陵が水戸藩に仕える
文化元	1804	稽医館（小川郷校）が開設される
文化４	1807	延方学校（延方郷校）が開設される
文政 10	1827	本間玄調が華岡青洲の塾に入る
文政 12	1829	徳川斉昭が水戸藩９代藩主となる
天保元	1830	佐藤中陵が「山海庶品」編修係りとなる
天保６	1835	斉昭が「医弊説」を公表する 敬業館（湊郷校）が開設される
天保８	1837	益習館（太田郷校）が開設される
天保 10	1839	暇修館（大久保郷校）が開設される
天保 12	1841	弘道館が仮開館する
天保 13	1842	冬に痘瘡（天然痘）が大流行、水戸地方で種痘が実施される
天保 14	1843	弘道館内に医学館が開設される 斉昭が「賛天堂記」を公表する 本間玄調が水戸藩の表医師となる
嘉永３	1850	水戸ではじめて本間玄調が牛痘種痘を実施する 時雍館（野口郷校）が開設される
安政４	1857	弘道館が本開館する
安政５	1858	７月に長崎で発生したコレラの流行が広がる 医学館製薬方がコレラ「除御薬」を製剤し領内に配布する
安政６	1859	医学館が『蕃痧病の手当并治方』（コレラ予防法）を領内に配布する
明治５	1872	学制発布にともない弘道館廃止、医学館も閉館する

江戸時代までの医学

日本の医学は、古くは大宝律令（701年制定）に基づき「典薬寮」という役所が設置され、その中に医博士がおかれるなど、漢方をはじめとした中国医学の導入が確認されています。これらは貴族官人層を主な対象にしており、庶民には修験者や寺院の僧侶などによって内科的医療が行われていたと考えられます。

平安時代末期以降は、武士の台頭にともない戦いが頻発する中で、実践的な外科医療の蓄積と普及があったと考えられ、戦国時代には曲直瀬道三（1507-1594）など優れた医師の存在が確認されます。道三は足利学校の田代三喜（1465-1537）に学び足利将軍家や天皇家を診察し、養子の玄朔は豊臣家から徳川将軍家にも仕え、曲直瀬家は江戸幕府の奥医師として続きます。

幕府を開いた徳川家康もまた医薬に関心を持ち、薬園や製薬などの事業に取り組みました。また、健康維持のために粗食を心がけ、晩年まで鷹狩りなどで体を動かして鍛錬に努めていたことが知られています。



曲直瀬道三
〔『中外医事新報（840）』（国立国会図書館デジタルコレクション）〕

水戸藩の医学

医学 前期 徳川光圀の時代

江戸時代前期、特に2代藩主徳川光圀在世の時代は、元禄文化を生んだ安定した時期でした。諸藩の藩主たちは、学問や文化、産業の振興をはかり、自然科学においても、日常の生活に役立つ数学・暦法・農学・本草学が発達し、なかでも人間の生命にとって最も大切な医学が進歩していきました。

水戸藩では、光圀の奨励によって医学の基礎が築かれました。光圀はさまざまな薬の処方を集めた「奇方西山集」8巻を編さんするなど、医薬への関心が高く、また、筑間玄述を長崎に派遣してオランダ医学を修めさせたり、名鍼医を侍医にするなど、医療にも熱心に取り組みました。

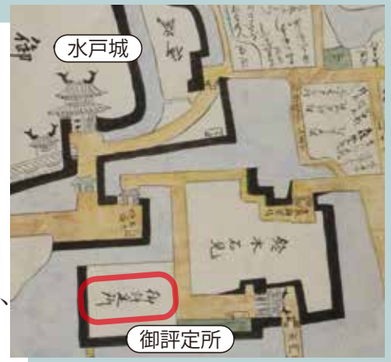
西山御殿（西山荘）に隠居後の光圀が、侍医鈴木宗与に命じて『救民妙薬』を編さんさせたのは、農村の領民の医療にまで広く役立てたいという切なる思いからです。

桃源遺事

光圀の事蹟や逸話などを集大成したもので、家臣三木之幹ら3人によって元禄14年(1701)に編さんされました。

光圀が江戸藩邸に薬室を設け、医師に「御薬坊主」という役職を授けて丹薬・丸薬・薬酒・薬油を作らせ、また、中国・朝鮮・オランダなどから取り寄せた薬も貯え置き、諸士や水戸家出入りの者などの求めに応じて分けていたことが記されています。

これらの薬は、水戸の評定所にも常備させ、願い出の者には身分を問わず分け与えていました。



「水府家御屋敷割図」（茨城大学図書館所蔵）部分

茨城県立歴史館所蔵

徳川光圀陶像（久昌寺所蔵）

水戸藩 2 代藩主 徳川光圀 (1628－1700)

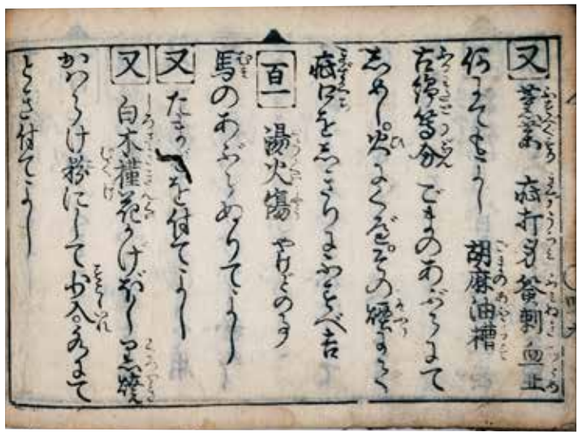
号は常山・梅里・西山など、諡は義公。草創期の水戸藩政への積極的な取り組みだけでなく、『大日本史』編さんをはじめとする文化事業にも力を注ぎました。領民の健康に心を配るとともに、自身も日々の食事などに留意し、73歳の長寿をまっとうしています。

救民妙薬（きゅうみんみょうやく） 元禄６年 (1693) 刊

光圀は、藩内巡視の際に領民の生活を見聞し、領民の医療に役立つ書物の必要性を強く感じ、侍医の鈴木宗与（穂積甫庵）に命じて『救民妙薬』を編さんさせました。水戸領内で採れる薬草を主な材料にした397種の薬方がまとめられ、家庭医学書の先駆けともいえるものです。

携帯に便利な縦10.8㎝、横16.4㎝の小型本で、文字は大きく、漢字には振り仮名をつけて普及を図りました。

その後、『救民妙薬』は藩内外へと広まり、何度も版を重ね、大正時代まで多くの人々に活用されていました。



〈序文〉

大君予に命すらく山野
貧賤の地にハ医もなく
薬もなし下民病て臥
時ハ自治するを待不治者或
死或廃人となる是皆非
命なり求やすき単方
を集て是にあたへ是を
すくへと予謹承命其病
其処に求め易き薬方
三百九十七方編集して
救民妙薬と名つけて
深山野居の者に与之
庶幾済民の一助ならんか
元禄癸酉歳
常陽水戸府医士
穂積氏甫庵宗与撰

〈大意〉

大君（光圀様）が私に命令するには、僻地や貧困な場所には医者もおらず薬もない。人々が病を得てしまったときには寝込んで回復することを待つのみで、回復しないものは死んでしまったり、あるいは寝たきりになってしまう。これは天命ではなく惜しむべきことであるので、手に入れやすい薬のつくり方を収集して、人々に伝え、救えとのことである。私は命令を承り、それぞれの病状に対して簡単な薬のつくり方を三百九十七通り編集して救民妙薬と名付けて、僻地にいる人々に与える。どうか人々を救うことの一助になることを願う。

元禄癸酉歳（元禄六年）

常陸国の中心水戸の医士

穂積甫庵（こと鈴木）宗与撰

救民妙薬の内容

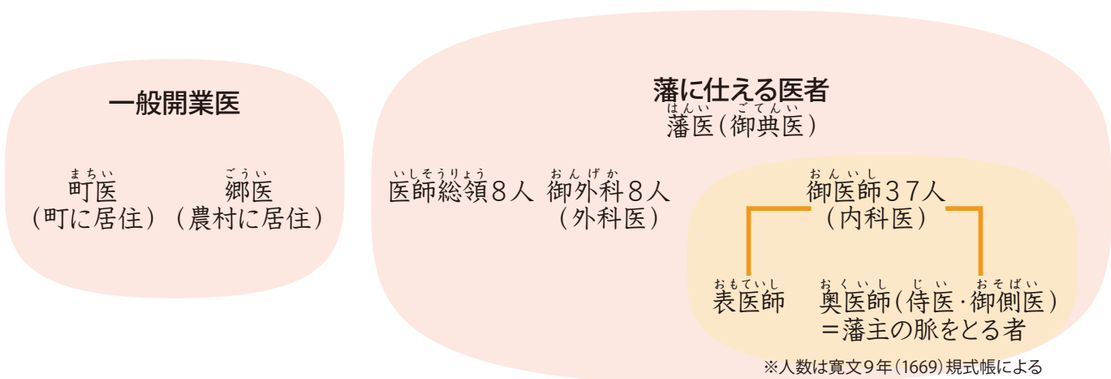
救民妙薬には、中風・酒毒・蛇咬・痔・霜焼・虫歯・頭痛・打身・疱瘡など合わせて130項、397種の処方が収められています。

光圀と鍼灸

光圀は、当時の医療で重要視されていた鍼灸にも熱心で、中国の医学書「千金方」を儒臣の人見林塘に和訳させ、自らも筆をとったと伝えられています。

また、名鍼医の西村元春（尾張）や宮井道先（京都）を水戸藩に招き、側医にしました。西村元春の子孫は代々水戸藩に仕え、流派は西村流と呼ばれ、その門からは鍼の名人が出て、「水戸の鍼」として名高かったといいます。

光圀時代の医者の体制



医学 中期

原南陽らの活躍

江戸時代中期になると、京都の山脇東洋が解剖記録『蔵志』を著すなど、医学において観察や経験に拠る実証主義が重んじられるようになりました。また、蘭学の勃興によって西洋医学も輸入され、安永３年(1774)には江戸の杉田玄白・前野良沢らにより『解体新書』が出版されます。

水戸藩でも安永から文化期(1772 ~ 1818)にかけて、藩医原南陽によって実証的医学が取り入れられ、医学・医療が発展しました。

南陽は、６代藩主徳川治保の代から治紀・斉脩と三代の藩主に仕え、医学者として、また臨床における名医として水戸の士民に信頼されていました。また、南陽は多くの著作を残すとともに、220名にもおよぶ門人の養成にも力を注ぎ、実証的医学の普及に貢献しました。

原南陽〔藤浪剛一 編『医家先哲肖像集』(国立国会図書館デジタルコレクション)より〕

藩医 原南陽（1753—1820）

諱は昌克、号は南陽・叢桂亭。祖父の代から医を業とし、父の昌術は５代藩主宗翰の侍医。「余が学ぶ所は方に古今なし、其験あるものを用ゆ（私が学んだ医術には古いも新しいもない。ただ効果があるものを用いるのだ）」(『原南陽一』漢方医学書集成十八)という南陽の言葉には、医療において実証主義を徹底した姿勢が示されています。

原南陽の門人

南陽の名声の高まりとともに水戸領外からの入門者も増え、常陸に隣接する奥州・下野・下総のほか、京都や佐渡・伊勢地方からの入門者もありました。

水戸領内の124人の門人の中には、木村謙次（北方探検家・農政論者）、高野昌碩（郡奉行・農政論者）、木内玄節（本草学者）らがいます。門人録には名前がありませんが、のちに医学館で活躍する本間玄調も門人の一人です。南陽の実証的医学の教えを受けた門人たちが、水戸藩の医学・医療を担っていったのでした。

原南陽入門者の年代・地方別表　（『水戸市史 中巻（二）』より）

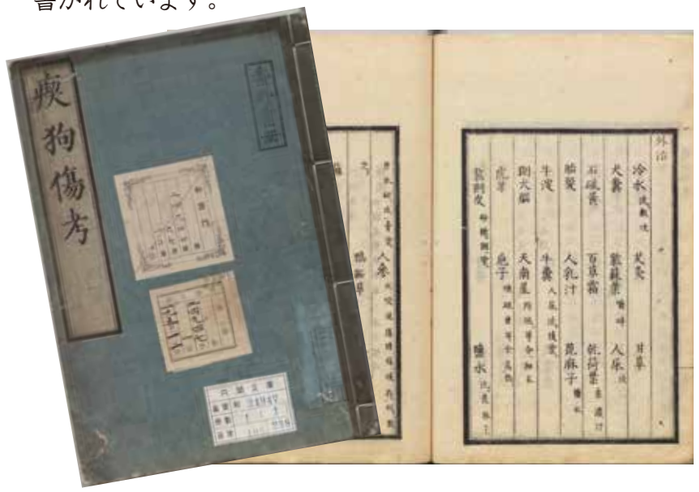
地方別＼年代	安永 1772～1780	天明 1781～1788	寛政 1789～1800	享和 1801～1803	文化 1804～1817	文政 1818～1829	計
常陸							
水戸領	１８	２３	３５	１７	２８	３	１２４
水戸領外	３	５	１５	４	１２	２	４１
奥州			４	２	１	２	９
下野		２	６		４		１２
下総			１	２	４		７
その他			２		６	９	１７
不明			４	１	４	１	１０
計	２１	３０	６７	２６	５９	１７	２２０

（「叢桂亭原南陽先生門人録」により作成）

原南陽の著作

瘈狗傷考　天保７年 (1836) 刊行

１巻、天明３年(1783)立原翠軒の序あり。狂犬病や鼠咬（鼠に咬まれて毒がまわる病気）についての症状や解毒法などが仮名書で分かりやすく書かれています。



国立公文書館所蔵（寛政８年再刻本）

叢桂亭医事小言　文政３年(1820)刊行

7巻、享和3年(1803)の自序あり。南陽の口授を門人らが筆記校正したもので、水戸や近在の患者を治療した例が多くあげられています。享和元年に岩根村（水戸市岩根町）の雷に打たれた農民を全治した話は有名だったそうです。

戦陣奇方砦草(砦艸)文化8年(1811)刊行

１巻、文化元年(1804)の自序あり。日本で最初に出版された軍陣医書で、兵士の飲食衛生、毒蛇対策、防寒など、戦時に必要な軍事的医学知識が記されています。常に携帯できるように、縦15㎝、横11㎝の大きさです。

山脇東洋と『蔵志』

京都の山脇東洋(1706−1762)は、宝暦４年(1754)に日本で初めて官許を得て刑死体の解剖（腑分け）を行い、その解剖観察の成果を宝暦９年に『蔵志』２巻として刊行しました。日本最初の解剖書である『蔵志』は、中国古来の五臓六腑説（五臓は肝・心・脾・肺・腎、六腑は胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦）が主であった医学界に大きな影響を与えました。

山脇東洋肖像（国立科学博物館所蔵）

『蔵志』（研医会図書館所蔵）
出典：国書データベース，https://doi.org/10.20730/100311002

杉田玄白と解体新書

明和８年(1771)、蘭方医学を学んでいた杉田玄白(1733−1817)は、前野良沢らとともに江戸小塚原で行われた刑死体の解剖に立ち会い、持参したオランダの医学書『ターヘル・アナトミア』の解剖図の正確さに驚き、翻訳を決意しました。玄白らは、翌日から良沢の家に集まって翻訳を始め、苦心の末、安永３年(1774)に『解体新書』５巻を出版します。

杉田玄白肖像（早稲田大学図書館所蔵）

『解體新書』（国文学研究資料館所蔵）
出典：国書データベース，https://doi.org/10.20730/200026112

幕末 後期 徳川斉昭の時代

光圀以来の水戸藩の医学の成果を継承した9代藩主徳川斉昭は、光圀の「奇方西山集」にならい「景山奇方集」55巻を編さんするなど、医薬について深い関心をもっていました。天保6年(1835)には「医弊説」を記し、医薬が「保命の大具」であることを強調するとともに、名利(名誉と利益)にはしる医者の現状を批判して医界の改革を主張しました。

このような斉昭の医学・医療に対する積極的な姿勢は、天保14年(1843)の医学館開設として結実します。医学館には斉昭自撰自書の「賛天堂記」が掲げられ、医学教育のほか、製薬や治療なども行われました。特に領民を脅かした痘瘡(天然痘)に対しては、斉昭は自ら「景山救痘録」を著し、医学館教授の本間玄調らとともに懸命な努力をしながら種痘を広め、その予防に力を尽くしています。

水戸藩9代藩主 徳川斉昭 (1800－1860)

号は景山・潜龍閣、諡は烈公。藩政改革を推し進め、その一環として藩校弘道館と偕楽園を創設しました。この肖像画は、斉昭が藩主就任後に初めて水戸に帰国した際に描かれたもので、若き先導者としての改革への思いが伝わります。

徳川斉昭『源烈公真筆』(国立国会図書館デジタルコレクション)

青山延于宛斉昭書簡

青山延于(左)・藤田東湖(右)肖像
『水藩人物肖像』(国立国会図書館デジタルコレクション)

斉昭の信頼できる家臣で、学問の師でもある青山延于の次男延昌が結核に倒れた際、自ら延于に送った書簡です。書中では、斉昭が入手した薬の処方を伝え、また、看病時の感染予防も指示しつつ、老齢の延于や他の子息を心配しています。

斉昭は、家臣の健康に気を配り、たびたび書簡や薬を送っています。側近である藤田東湖にも、中風を案じ、飲酒を控えるよう書簡で伝えています。

「医弊説」(京都大学附属図書館所蔵)をもとに合成

医弊説

斉昭は、天保6年(1835)に「医弊説」を記し、「医薬なるものは、保命の大具、死生存亡の依る所(原漢文)」にもかかわらず、その大具をあずかる医者が名利にはしる現状を痛烈に批判し、医界の改革を主張しました。この史料は写しで、斉昭自書の「医弊説」は、「賛天堂記」と同様に板額に刻まれていたことが、彫師の潮田巧蔵に宛てた書簡からわかります。

斉昭を頼る庄内農民

天保11年(1840)、幕府から庄内藩・長岡藩・川越藩に下された領地替えの命令(三方領地替え)に対し、庄内藩では士民の反対運動などがおこり、命令は撤回されました。その経過がまとめられた「合浦珠」(56巻)には、水戸に帰国中の斉昭に庄内農民の代表が直訴したことが記されています。

斉昭は、農民たちをなだめ、庄内藩にもどるよう諭し、長い道中に疲労で病にかからないようにと神仙丸などの薬を与えました。「合浦珠」に筆記されている薬の包紙からは、農民たちの斉昭への感謝の思いが伝わってきます。

斉昭の著作

斉昭は、藩政改革を推進する過程で、必要な情報や知識を積極的に収集し、その成果を多くの著作として残しています。斉昭の執筆・編さんによる著作の分野は多岐にわたり、総数は100点を越すといわれています。清水正健著『増補・水戸の文籍』には、斉昭の主な著作として、「景山奇方集」や「景山和薬集」、「景山救痘録」、編さんを命じた「山海庶品」など医薬や種痘に関するものが掲載されています。

清水正健『増補・水戸の文籍』

斉昭の種痘にかける情熱

斉昭は種痘の普及に強い決意をもって臨みました。残された著作や書簡の中には、その情熱をうかがわせるものが多くあります。

徳川斉昭著「景山救痘録」の一部

「種痘は牛痘がよいが、その種は入手困難だからというので、父母に悪病のない子の軽痘を選んで、それを種とする人痘種痘の法を詳しく説明し、それを自分の子に試みたが、すべて軽痘だったから、水戸領内に広めたいけれど、多くが旧弊にとらわれて、医学の進歩を信じないので、まだそこまでに至っていない、しかし自分は種痘館を各地に設け、年に1000人ずつでも一度に種痘させ、小児を痘瘡の苦難から救ってやりたい、そのためには他人の誹謗などかまってはいられない」(大意)

金子孫次郎宛斉昭書簡

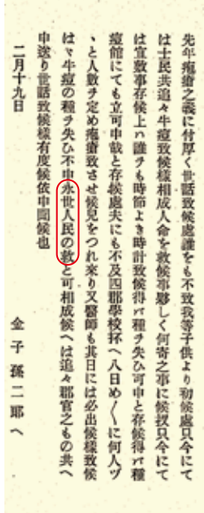
(『水戸藩史料　別記下』)

斉昭は、安政4年(1857)2月に郡宰の金子孫二郎に宛てた書簡で、念願だった種痘館の設立も今となっては必要ない、毎月8日に人数を定めて種痘をさせれば、牛痘種も失われず「永世人民の救」となるであろうと伝えています。

わが子への種痘

(「天保日記」天保14年3月25日の条より)

水戸で種痘が開始された頃、斉昭は2度目の帰国中(天保11年～同14年)でした。斉昭は側医の松延道円(定雄・年)に命じ、水戸に滞在中であった公子(子供)のうち、八郎麻呂(昭融・直候)とその弟九郎麻呂(昭休・茂政)の二人に種痘を行わせています。その後、長男の鶴千代(のちの藩主慶篤)にも行う予定でしたが、急な発熱で延期になったといいます。わが子からはじめたのは、種痘の普及への強い思いからでした。


先年痘苗之義に付厚く世話致候處謹をも不致我等子供より初候處只今にては十民共追々牛痘致候様相成人命を救候事夥しく何寄之事に候扨只今にては宜敷事存候上ハ謹ヲも時節よき時計致候得ハ種ヲ失ひ可申と存候得ハ種痘館にても立可申哉と存候處矣にも不及四郡學校抔へ八日め〳〵に何人ッゝと人數ヲ定め痘苗致させ候見をつれ来り又醫師も其日には必出候様致候はゞ牛痘の種ヲ失ひ不申永世人民の救と可相成候へは追々郡官之もの共へ申送り言話致候様有度候依申聞候也

二月十九日　　金子孫二郎へ

食菜録(石島績著『水戸烈公の医政と厚生運動 下巻』)

「食菜録」は、斉昭が編さんしたレシピ集で、約300種類の料理の調理法が掲載されています。斉昭は、日頃から粗食に努め、体に良い食材を選んでいたといいます。調理法にも興味を深め、献上された新米を夫人とともに自ら炊飯することもありました。

「食菜録」には、高級食材もみられますが、通常は捨ててしまうような食材の活用方法や、長期保存に適した調理方法など、実用的なレシピが多くあります。採録されているレシピからも、斉昭の食に対する姿勢がうかがえます。

石島績著『水戸烈公の医政と厚生運動 下巻』(1943年刊 日本衛生会)

石島績氏と『水戸烈公の医政と厚生運動』

石島績氏(1884−1946)は千葉県に生まれ、日本医学校卒業後、茨城県警察医や衛生技師として茨城県内の公衆衛生に携わりました。

『水戸烈公の医政と厚生運動』は上下2巻で、上巻には徳川斉昭撰「賛天堂記」や「医弊説」、医学館や郷校、痘瘡やコレラの予防など、下巻には斉昭の衣食住への関心と施策について記され、「食菜録」や「食薬」の翻刻が掲載されています。

石島績氏の「食菜録」についての記述

石島績氏は、「食菜録」全編を通じて特に感じられる点として次の5点をあげています。

(1)材料はできるだけ地元産のものを用い、新鮮さ・嗜好・栄養を重視し、かつ経済的・合理的であるように考えられている。
(2)長期の保存ができるように調理されているものが多い。これは、有事や災害の時などの食料にすることを考慮したものと思われる。
(3)調味料として、塩・味噌・醤油・酢・糀・酒・味醂等を多く用い、特に砂糖の使用が少ない点が注目される。
(4)加工食品類を自家で製造し、自給自足できるようにしている。
(5)香辛料として生姜・山椒・陳皮・粉芥子・肉桂などをあげているのは、食欲増進の目的のほか、食薬として重要視していたためである。

「食菜録」の料理の再現

水戸食菜録研究会では、「食菜録」に記された料理を再現しました。調理動画が食菜録webサイトに掲載されています。

蛤はんぺん

蛤のわたのかたを去り、堅き所を細に刻み、大根を摺子木にして(但し大根のをり申さず位)かき廻し、其後、銅摺鉢に入れ、摺子木にて能くすり、生塩を入れて尚能くすり、其後湯煎にする也

(下巻百八十三)

水戸食菜録研究会とwebサイト

「食菜録」について、内容・意義の調査・研究を推進することを目的として、水戸食菜録研究会(主幹・荒木雅也茨城大学教授、令和4年4月発足)では食菜録webサイトを公開・運営しています。ここでは研究成果の公表や「食菜録」のレシピ検索、料理再現動画等を公開しています。詳しくは食菜録webサイトをご覧ください。

食菜録 web サイト

弘道館医学館を支えた郷校

藩士とその子弟の教育を主とした藩校弘道館に対して、郷校は農村有志のための教育機関です。水戸藩でははやく文化元年(1804)に稽医館、同４年に延方学校がともに郷医の育成と研修を目的に設けられていました。斉昭の藩主就任後は、「天保の改革」と呼ばれる藩政改革の一環として、天保６年(1835)に敬業館、同８年に益習館、同10年に興芸館(のち暇修館と改称)が相次いで建設されました。また、嘉永３年(1850)に建設された時雍館も天保期に計画されています。

各校の建設には地元の郷士(武士の身分のまま農業に従事した者、また武士の待遇を受けていた農民)や郷医、神官、村役人らが積極的に協力し、用地の選定から図書･備品の調達などにあたり、開館後の運営にも大きな役割を果たしました。

これら文化から嘉永年間に開設された郷校は、特に郷医の研修に力が注がれていたことに特色があり、のちに種痘をはじめとする医学館の活動を支える存在となります。

水戸藩の郷校一覧

瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』(7－8 頁)の表をもとに作成

校　　名	年　　代	場所(現在の場所)
稽医館(小川郷校)	文化元年(1804)	茨城郡小川村(小美玉市)
延方学校(延方郷校)	文化4年(1807)	行方郡延方村(潮来市)
敬業館(湊郷校)	天保6年(1835)	那珂郡湊村(ひたちなか市)
益習館(太田郷校)	天保8年(1837)	久慈郡太田村(常陸太田市)
暇修館(大久保郷校)	天保10年(1839)	多賀郡大久保村(日立市)
時雍館(野口郷校)	嘉永3年(1850)	那珂郡野口村(常陸大宮市)
大子郷校	安政3年(1856)	久慈郡大子村(久慈郡大子町)
大宮郷校	安政3年(1856)	那珂郡大宮村(常陸大宮市)
町田郷校	安政4年(1857)	久慈郡町田村(常陸太田市)
小菅(小里)郷校	安政4年(1857)	久慈郡小菅村(常陸太田市)
秋葉郷校	不詳	茨城郡秋葉村(東茨城郡茨城町)
鳥羽田郷校	不詳	茨城郡鳥羽田(行方市)
玉造郷校	安政5年(1858)	行方郡玉造村(行方市)
潮来郷校	安政3年(1856)	行方郡潮来村(潮来市)
馬頭郷校	安政4年(1857)	下野国那須郡馬頭村(栃木県那須郡那珂川町)

文化から嘉永年間に開設された郷校の位置

斉昭によって天保期に建設･計画された敬業館･益習館･暇修館･時雍館の位置をみると、藩内の東西南北の各郡に１校ずつという方針があったことが考えられます。

瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』(14 頁)の図をもとに作成

暇修館（大久保郷校）天保 10 年開設

開設時の校名は「興芸館」といい、「興芸」の「芸」は医者の技術を意味すると解されます。天保 11 年 (1840) に斉昭が地方巡視の途中で同館に宿泊したさい、初代館守の大窪光茂が斉昭の前で中国の医書『傷寒論』を講義しています。弘化元年 (1844) に校名を暇修館に改め、学びたい者に広く門戸を開きました。

『傷寒論』（京都大学附属図書館所蔵）

暇修館（復元）外観写真

益習館（太田郷校）天保８年開設

太田でははやくから馬場御殿や陣屋で郷医の会読が行われていました。益習館が開設されると、郷医の研修を主としながら、好学の農民も教育の対象となりました。初代館守は元薩摩藩士の日下部連で、没後は長男伊三治が受け継ぎました。現存する「益習館」扁額は、水戸藩の重臣で書家としても有名であった鵜殿清虚の揮毫です。

益習館扁額（常陸太田市立太田小学校寄託）

敬業館（文武館、湊郷校）天保６年開設

郡奉行吉成信貞らの尽力で開館し、初代館守は藤田幽谷の門人堀川潜蔵がつとめました。蔵書は、藩内の郷校の中でもっとも多く、和書・儒書・医書など6700冊余にのぼります。安政４年(1857)に武館の機能を加えて移転し、「文武館」と改称されました。

「文武館址」石碑

延方学校（延方郷校）文化４年開設

郡奉行小宮山楓軒が、元加賀藩士沢田平格が開いた私塾の隆盛を知り、地元有志と協力して孔子を祀る聖堂を設立し、「延方学校」、「聖堂学校」などと呼ばれるようになりました。聖堂には、８代藩主斉脩親筆「至聖先師孔子神位」の木碑が祀られていました。教師の平格は学校内で生活して教育にあたりました。聖堂は明治期に移築され、二十三夜尊として現存しています。

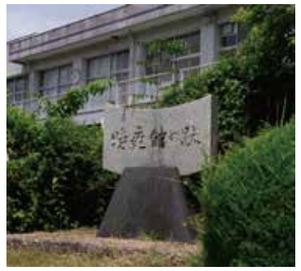
二十三夜尊（旧延方学校聖堂）

稽医館（小川郷校）文化元年開設

名医として知られた本間玄琢が、郡奉行小宮山楓軒を介し、６代藩主治保に郷医の医学研究所設立を願い出、許可とともに「稽医館」の名を賜りました。郷医の研究集会のほか、種痘や手術の実習も行われました。運営を担った本間家の医術は、玄琢、玄有、そして医学館教授となった益軒、玄調と受け継がれました。歴代藩主が稽医館を訪れ、天保４年（1833）には斉昭も巡村のさいに医書の講習を聴聞し、「神名記」を親書しています。

水戸小川稽医館碑

時雍館（野口郷校）嘉永３年開設


「時雍館の跡」石碑

弘化元年(1844)に建設されましたが、斉昭の失脚などにより開館が遅れ、嘉永３年(1850)から教育活動が開始されました。初代館長は綿引玄随で、医師師範には藩内でも著名な医者大森桃蹊が招かれています。弘道館には、「時雍館蔵版」の会沢正志斎著『迪彝篇』の版木が所蔵されており、時雍館との連携がうかがえます。

麗沢館 天保 11 年建設

水戸城下で開業していた町医らは、はやくから下町本一町目の会所で医書講釈の集会を開いていました。天保10年(1839)頃になると、この集会に医者だけでなく町人も参加できるようになりました。同時に、彼らから文庫や学館の建設を要望する声が高まり、翌天保11年には紺屋文庫と麗沢館が建設されました。麗沢館は、水戸城下にあった、地方の郷校に相当する教育機関といえます。

「水府家御屋敷割図」（茨城大学図書館所蔵）部分

安政年間以降の郷校

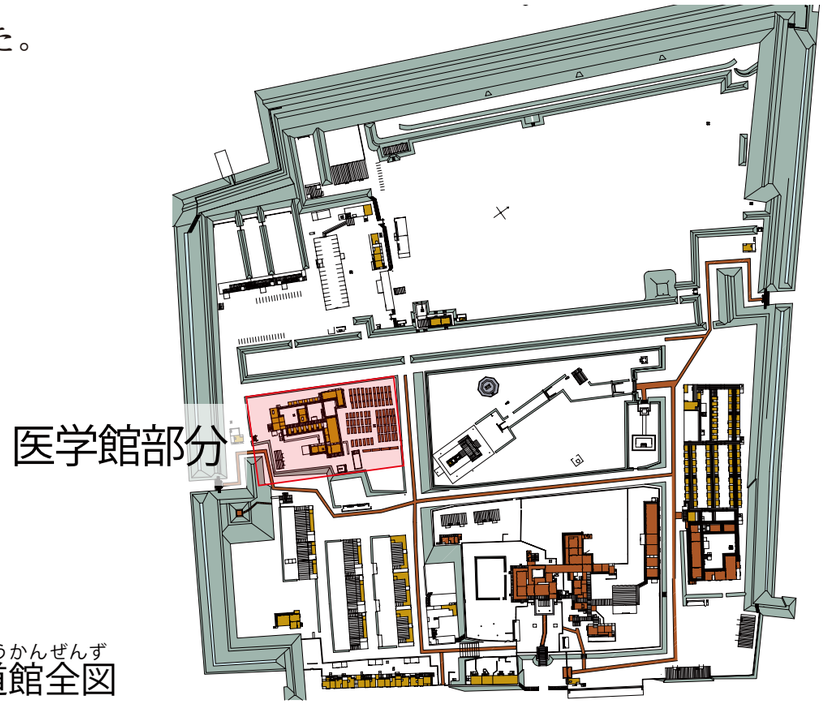
水戸藩の郷校は安政年間以降に９校が新設され、既設の郷校も新設校と同じく所在地名をつけて呼ぶようになりました。教育の対象は郷医、神官、村役人などのほか、農兵や農民有志から猟師まで広く農村在住者に拡大されました。ペリー来航など内外の変化に伴い、教育内容も実戦的教育が中心となり、郷校は尊攘運動の拠点となっていきました。

弘道館医学館

医学館の開設と「賛天堂記」

弘道館の仮開館から約２年後の天保14年(1843)６月28日、弘道館の敷地内に医学館が開設されました。水戸藩では、郷校が郷医の研修の場にもなっていましたが、斉昭は藩内の医学教育・医療機関のセンターとして医学館を設けたのです。同年８月には、医学館開設の主旨を斉昭が自ら記した「賛天堂記」が講堂に掲げられました。「賛天堂記」には、外国に頼らず国内で良薬を製することの重要性を説くとともに、この医学館をわが国の医学・医療体制のモデルにしたいという抱負が示されています。

全国の藩校のうち、医学館あるいはそれに準ずる施設を備えていたのは40校余で、全体の約16パーセントであり、なかでも「賛天堂記」のような開設の主旨を掲げた医学館は稀です。医学館に製薬局・調薬局・本草局などを設け、薬園や牛乳・牛酪を作るための牛部屋（養牛場）まで備えたのは、「賛天堂記」の主旨を実現するためでした。



弘道館全図

賛天堂記拓本

医学館の講堂（賛天堂）に掲げられていた板額「賛天堂記」の拓本です。「賛天」とは、中国の古典『中庸』の「能く物の性を尽くせば、則ち以て天下の化育を賛くべし」という文章の「天」と「賛」の二文字をとって斉昭が名づけたもので、「よく物の性をまっとうすれば、天地の生育する働きを助けることになる」という意味があります。

輸入にたよる医薬・医療では、有事の際に対応できないと警鐘を鳴らし、国内のあらゆる薬草や文物を収集分析することで、新しい国産の医薬を作りだすことを目的として示しています。

賛天堂記の意匠に関する書簡

下の史料は、彫師の潮田巧蔵が小姓頭取を介し、彫刻した「賛天堂記」の色について斉昭の希望を伺った書簡と、それに対する斉昭の返書です。

斉昭は、色の指定とともに、額をかけられるような細工をし、医学館のほか、医学館教授の松延定雄（年）、助教の本間謙（益軒）などの家にも廻して掛けるよう指示しています。

また、斉昭の返書からは、潮田に「医幣説」の彫刻も命じていたことがわかります。

賛天堂御額彫刻上申候間相納可申候也
御地板へ色付御文字之中へは何二而も
御入被遊候哉御伺可被下候以上
六月廿四日　潮田巧蔵
御小姓頭取様

賛天堂の御額を彫刻いたしましたので お納めさせていただこうと考えております。
御地板へは色を付け、御文字の中へは何か(色)をお入れする御意思がおありかどうか お伺いしていただきたく思っております。以上
六月二十四日　潮田巧蔵
御小姓頭取様

<参考>
偕楽園
好文亭内の
対古軒額

地ハ好文亭対古軒の額の
如く黒く致し文字ノ内へハ
何も入不申方よろしく
額ノ裏へハ穴明ケ候とも又は
鐶打候ともいたし額ニかけ候
事相成様ニ致し医学
館定雄謙等の方へ廻し可申候
一医幣之節ハ未出来不申候哉
如何

地は好文亭対古軒の額のように黒くして文字の内には何もいれないほうがよく、額の裏には穴をあけるか、または鐶を打って額をかけるようにつくり、医学館や(松延)定雄、(本間)謙などの宅にも廻す(回覧して掲げさせる)ようにしなさい。
また、医幣説の方はまだ完成していないのだろうか。

居学寮（きょがくりょう）

居学生(研究生)の学習所。舎長の直所(控室)がある。

蘭学（蘭学局）（らんがく　らんがくきょく）

蘭学の講義や研究を行う。
人数を限定(8名程度)して行われていた。

本草（本草局）（ほんぞう　ほんぞうきょく）

本草学の研究や「山海庶品（せんがいしょぼん）」の編さんを行う。
「山海庶品」を描くための画工もおかれた。

病人溜（療病所）（びょうにんたまり　りょうびょうしょ）

病人の治療を行う。特に困窮者には無料で治療を施す。

薬園（やくえん）

薬の製造や研究に使用する薬草を栽培する。
どのような薬草が栽培されていたかは明らかではないが、医学館で製する薬の材料になる薬草と考えられる。

講席（講習寮）（こうせき　こうしゅうりょう）

講習生の教場

牛部屋（うしべや）

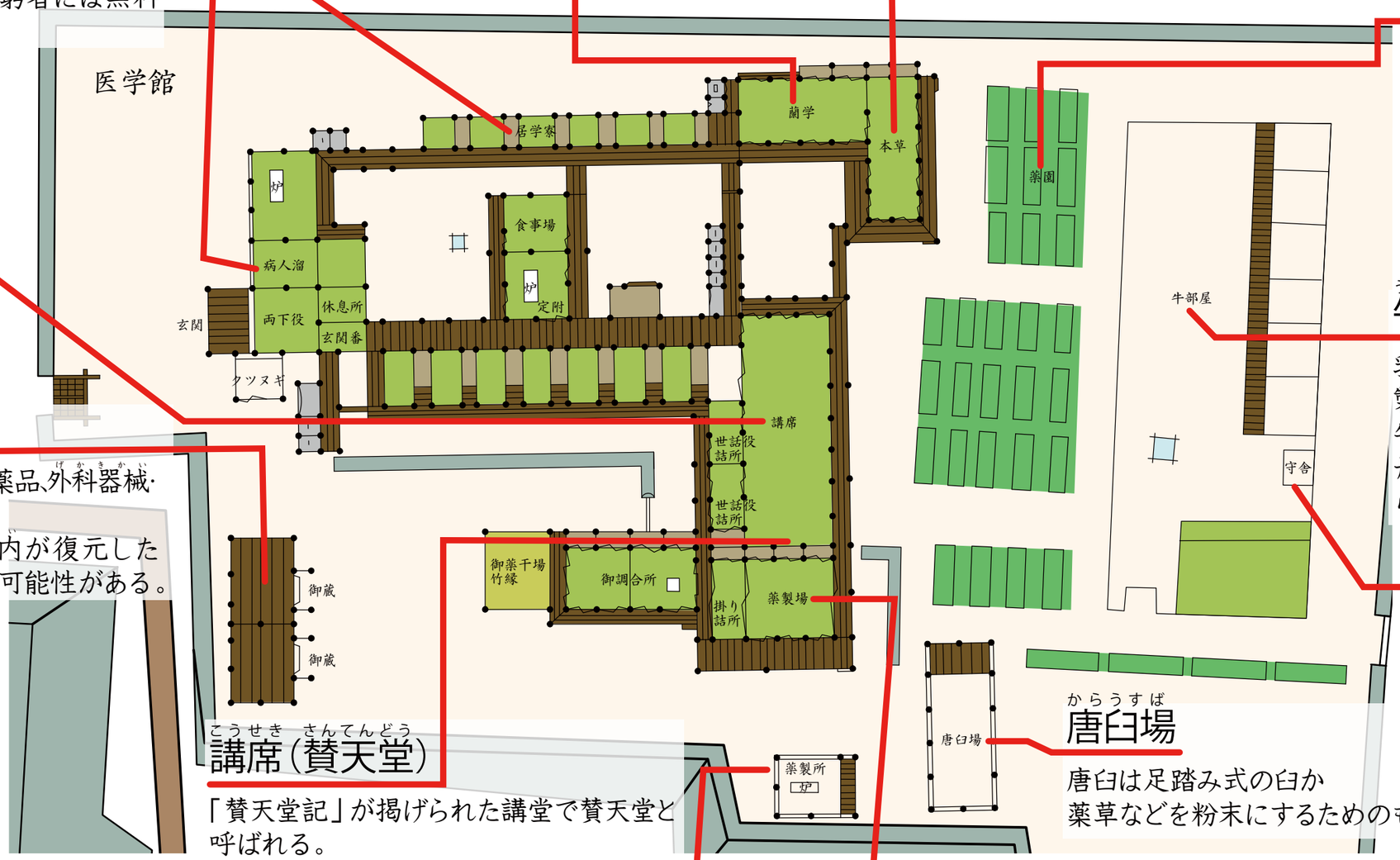
乳牛5、6頭を飼育。牛乳や牛酪（ぎゅうらく）を製造。
牛乳は桜野牧（水戸市見川町丹下地区）と呼ばれる牧場からも供給されていた。

御蔵（倉庫）（おんくら　そうこ）

医学に関する和書・漢籍（かんせき）・洋書・薬品・外科器械（げかきかい）・「電器」等を所蔵する。
「電器」は本草学者平賀源内（ひらがげんない）が復元したエレキテル（摩擦起電器（まさつきでんき））の可能性がある。

守舎（もりしゃ）

乳牛の飼育担当者がいる。



講席（賛天堂）（こうせき　さんてんどう）

「賛天堂記」が掲げられた講堂で賛天堂と呼ばれる。

唐臼場（からうすば）

唐臼は足踏み式の臼か
薬草などを粉末にするためのもの。

医学館内部（いがくかんないぶ）

医学館は、現在の三の丸市民センターから三の丸小学校体育館周辺に位置し、現存する弘道館の正庁（せいちょう）・至善堂（しぜんどう）と同等の規模であったと推定されます。ここには教場である講堂や講習寮のほか、様々な施設が置かれ、医学・薬学の研究が行われただけではなく、病人が願い出れば療病所での治療や、薬も無料で施されました。弘道館の出入りは水戸藩士に限られ、厳しく制限されていましたが、医学館の出入りは比較的柔軟に対応されていたと考えられます。

この図は、「弘道館全図」をもとに、「水戸弘道館雑志（みとこうどうかんざっし）」の記述などを参考に医学館の内部を推定したものです。

薬製場（製薬局）（やくせいば　せいやくきょく）

薬の研究や製造を行う。

薬製所（製紫雪局）（やくせいじょ　せいしせつきょく）

秘薬「紫雪（しせつ）」の製造を行う。
紫雪は専用の鍋で三日三晩煮詰めて製造するため、この図には炉が描かれている。

津田信存（つだのぶかず）「水戸弘道館雑志（みとこうどうかんざっし）」（写）

「水戸弘道館雑志」は、明治3年（1870）まで弘道館の教職にあった津田信存（つだのぶかず）が作成しました。弘道館そのものを記録しようという意図によってまとめられたものと考えられ、弘道館研究の基礎資料として貴重です。医学館についても、部屋の広さや機能などが詳細に記されています。

教育活動

医学館には、水戸藩で最初に種痘を行った本間益謙や、千巻にもおよぶとされる「山海庶品」を編さんした本草学の佐藤中陵など、一流の教授陣がそろい、国内外の医術をはじめ、診察、種痘、本草等の教育が行われました。また、蘭学局では、選抜された藩士が蘭学を学びました。

医学館では、藩医とその子弟だけでなく、郷医や町医とその子弟も教育を受けることができました。藩医とその子弟には、課試(試験)、会読(書物をもとに数人で議論すること)、輪講(数人が輪番で書物の講釈をすること)が行われ、郷医や町医とその子弟には、毎月2回の講釈が行われるとともに、それ以外でも自由に出入りができました。

さらには、郷医たちの大会が年2回開かれ、南北二郡と東西二郡に分けて集合研修や試験(見分)が行われました。この大会には、城下の町医も集まり、最も多いときで90人余の出席があったといわれています。

医学館の教育活動は、身分をこえて医療に関する情報を共有し、藩全体の医療環境を向上させようとするものでした。

医学館の職役

「水戸弘道館雑志」に記載された弘道館の職役のうち、医学館に関わるものをまとめた表です。教育・医療だけでなく、研究・製薬にも人員が配置されていたことがわかります。

職　　名	定員	内　　容
医学教授	3	侍医が兼務。内外医術を教授し、診察、種痘なども行う。宿直し、館内で傷病の者がでた場合に診察を行う。
助教(手副)	4	医学教授の補佐をする。学術に秀でた医師を立場にこだわらずに選任する。
蘭学教師	-	選抜した学生に蘭学を教授する。
監製薬医	2	製薬を監督する専門医。
製　薬　吏	4	製薬を担当する。
頒製薬吏	1	医学館で製造した薬や牛酪の頒布を担当する。
本草局長	1	本草学の教授と「山海庶品」の編さんを担当する。
画　　工	-	「山海庶品」の図写を担当する。
舎　　長	-	寄宿寮の管理を行う。

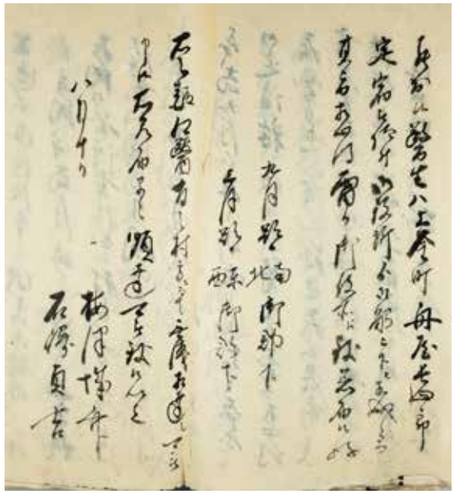
茨城県立歴史館所蔵

医学館書目

医学館で所蔵されていた約2200冊の書籍が掲載されています。最後の頁には、初期の医学館の教育に尽力した松延道円・本間益謙・土田萩庵(楸庵)・森庸軒の名前が記されています。

医学館大会招集状(写)

太田村(現在の常陸太田市)に回覧された招集状で、毎年9月1日と3月1日の医学館大会への出席を促すものです。



「太田村御用留」常陸太田市教育委員会所蔵

罷出候医生ハ上金町舟屋長四郎
定宿被仰付、御役所より御触被下ニ相成候間、
其旨相心得当日御役所江致着届候様
九月朔日　南北御郡下
三月朔日　東西御郡下
右之趣郷医有之村方ニ而は無洩相達シ可被
申候、右御届早々順達可被致候、以上
八月十日
梅津城介
石崎貞吉

…出席する医生は上金町舟屋長四郎の宿屋を定宿にするようにとの役所からの御触があったので、当日はそのように届け出を出すように。

九月一日　南北の郡下
三月一日　東西の郡下

このことについて郷医のいる村にはもれなく連絡をするように。この御触が届いたらすぐに各村に連絡するように。

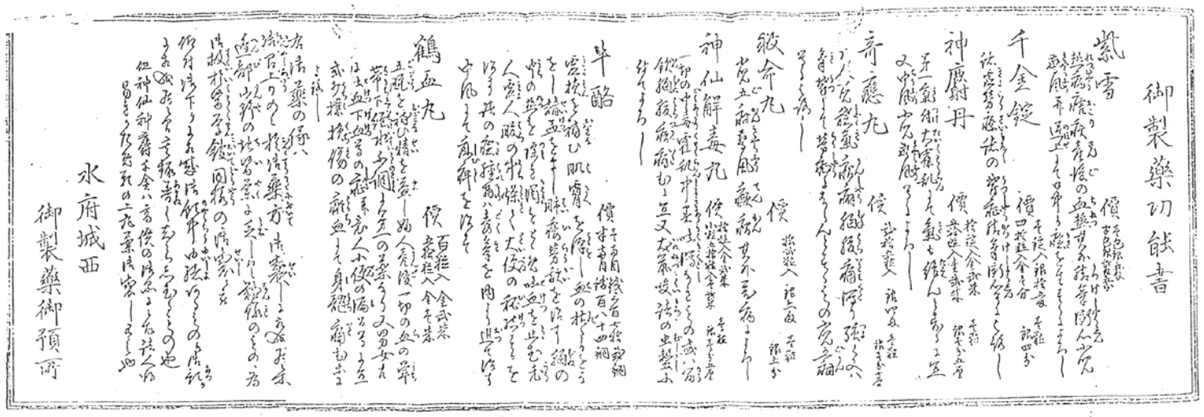
八月十日
梅津城介
石崎貞吉

製薬事業

斉昭は、自撰自書した「賛天堂記」の中で、高価な外国産の薬が好まれ、国内産の薬がかえりみられないことを批判し、国内で良薬を製造できるようにするため、30年にわたって薬物と医方（治療の方法）を収集し、弘道館に医学館を設けたとしています。

医学館には、製薬局、調薬局、本草局などが置かれ、薬園や牛部屋（養牛場）も設けられました。医学館で製造された良薬には、神仙丸、紫雪、紫金錠、千金錠、鶴血丸、牛酪などがありました。牛酪は、牛乳を固めた現代のバターに似たようなものです。医学館では、これらの良薬が処方され、困窮者には無料で与えられました。

本草局の教授に任命されたのが佐藤中陵です。中陵には、山海に存在するあらゆる動植物や鉱物の博物図鑑ともいうべき「山海庶品」の編さんが命じられました。「山海庶品」の編さんも、物質の性質を十分に理解し、万物を生み育てる天地自然の霊力の助けになりたいという、「賛天堂記」に込めた斉昭の考えを実践しようとするものです。



御製薬功能書（石島弘『水戸藩医学史』所収）

医学館で製造された良薬の効能が記された引札（広告）です。紫雪や神仙解毒丸など、広く知られたものだけでなく、牛酪や鶴血丸など、水戸藩らしい薬も記されています。「水府城西御製薬御預所」（水戸城の西側の製薬預り所）とありますので、現在の水戸市末広町で薬を取り扱っていた大高家のものと考えられます。

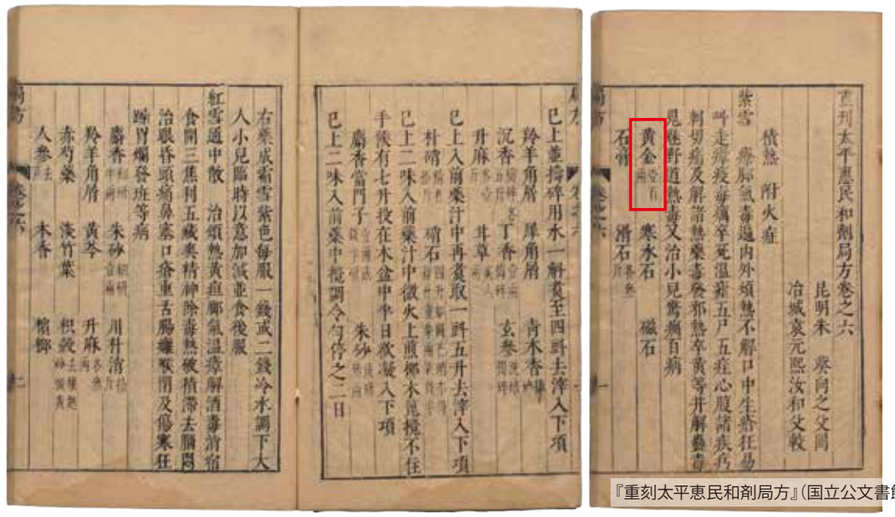
製薬名	主な功能
紫雪	熱病、脚気衝心
千金錠	脚気衝心
神麝丹	霍乱（吐き下しなど）、中風、子どものひきつけ
奇応丸	子どものひきつけ、腹痛
救命丸	子どものひきつけ、てんかん
神仙解毒丸	中毒、吐き下し、犬、鼠の噛みつき等
牛酪	吐血防止、便秘解消、中風、労咳（結核）
鶴血丸	産後の血の巡り、吐血、下血

紫雪引札（石島弘『水戸藩医学史』所収）

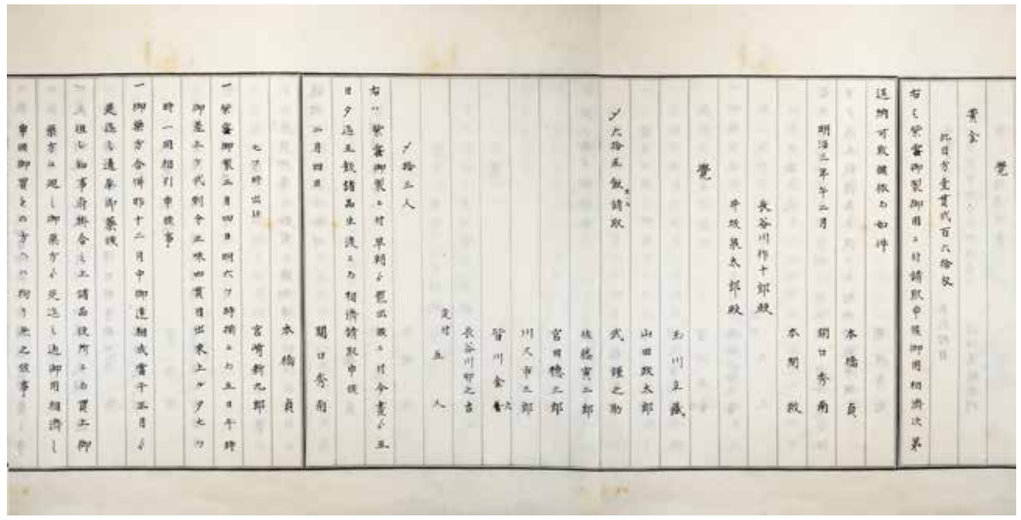
明治以降に配布された紫雪の引札（広告）です。紫雪は「天下無比の解毒剤」として売り込まれ、下部には紫雪を製造するのにつかわれた丹鼎が印刷されています。

〈参考〉紫雪の製造

多くの薬の処方を収めた『重刻太平恵民和剤局方』には、紫雪の製法が記されています。製造には多くの生薬が必要であり、特に黄金百両が必要な点は特徴的です。医学館での紫雪製造の際にも、藩役所から黄金を借り受けた記録が残されています。同記録によると、製造には13名で一昼夜かかり、その間の食事も支給されていました。



『重刻太平恵民和剤局方』（国立公文書館所蔵）



「水戸大高氏記録」71（茨城大学附属図書館所蔵）をもとに合成

佐藤中陵と山海庶品

山海庶品（せんがいしょぼん）水戸市立中央図書館所蔵

「山海庶品」は、植物、動物、金石を写し、その性質や効用を詳述したものです。

徳川斉昭の命により、天保元年(1830)に佐藤中陵（さとうちゅうりょう）が江戸藩邸で編纂を開始し、同7年に中陵が水戸勤めとなってからは水戸で行われ、医学館開設と同時に館内本草局（ほんぞうきょく）で継続されました。

一説には千巻にのぼるといわれる「山海庶品」は、明治元年(1868)の弘道館の戦いで大部分を焼失しましたが、中陵の末裔にのこった数冊などが現存しています。

＊「山海庶品」は、水戸市立図書館ＨＰ「貴重書コレクション」でご覧いただけます。

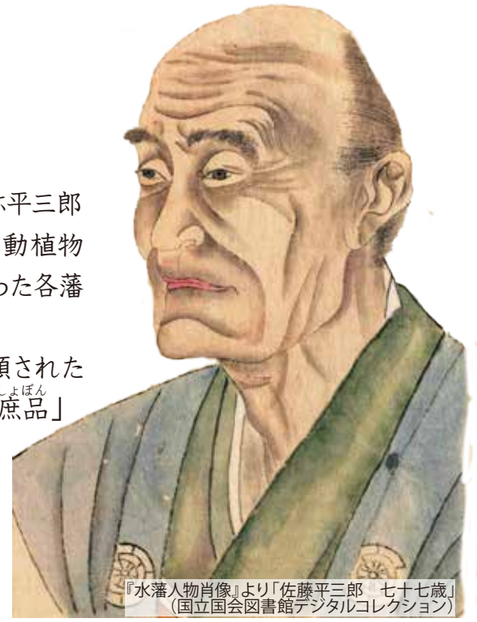
本草学（ほんぞうがく）とは

本草学とは、中国の植物学で、薬用とする植物・動物・鉱物の形態や産地、効能などを研究する学問です。

日本では、江戸時代に中国の明の李時珍（りじちん）の『本草綱目（ほんぞうこうもく）』が紹介されて盛んになり、中国本草書の翻訳や解釈にとどまらず、日本に自生する植物や動物などの研究が行われ日本本草学として発展しました。

李時珍／李建中『本草綱目』（国立公文書館所蔵）

医学館本草局長（いがくかんほんぞうきょくちょう） 佐藤中陵（さとうちゅうりょう） (1762－1848)

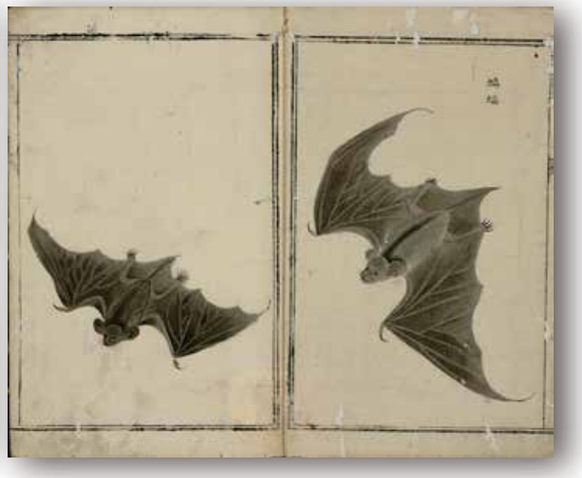


『水藩人物肖像』より「佐藤平三郎　七十七歳」（国立国会図書館デジタルコレクション）

名は成裕（せいゆう）、字は子綽、中陵は号、別号は菁我堂（せいがどう）、温故斎（おんこさい）、通称平三郎

中陵は、父から本草学を学び、全国各地を踏査（とうさ）して有用の動植物鉱物を採集し、研究を重ねました。薩摩、米沢、備中松山といった各藩に招聘（しょうへい）された後、水戸藩に仕えました。

６代藩主治保（はるもり）から９代藩主斉昭まで４代の藩主に深く信頼された中陵の勤務は48年間にわたりました。斉昭の命により「山海庶品（せんがいしょぼん）」を編纂し、医学館の開設とともに本草局長を務めました。



疫病との闘い

痘瘡から領民を救う―種痘の普及―

痘瘡（天然痘）は、強い伝染力と高い死亡率、また命をとりとめても顔や体に痕がのこることから、世界中で古くから恐れられていました。日本には６世紀に伝わったといわれ、江戸時代にたびたび流行をくり返しました。

江戸時代の承応２年（1653）、中国から日本に種痘法が伝わりました。寛政７年(1795)には、筑前秋月藩の医者緒方春朔によって人痘種痘の書『種痘必順辨』が出版されました。英国のジェンナーが牛痘種痘法を開発したのは1796年です。牛痘種痘が日本に広まりはじめるのは、嘉永２年(1849)に長崎に牛痘種の輸入が成功してからです。

緒方春朔〔『医家先哲肖像集』（国立国会図書館デジタルコレクション）〕

種痘必順辯（辨）（京都大学附属図書館所蔵）

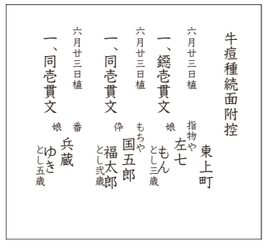
水戸地方での種痘の開始は、天保13年(1842)冬の痘瘡の大流行時で、本間益軒と養子の玄調が実施しました。弘道館に医学館が開設されると、斉昭の強い熱意により種痘は医学館の重要な事業になります。嘉永３年(1850)からは玄調によって牛痘種痘が開始され、以後、医学館の医者が各郷校などに出向いて種痘を実施するようになりました。

ジェンナー（Dr. Jenner - The National Library of Medicine）

斉昭と玄調は、まず自身の子供たちに種痘を行うことによって普及に努めています。斉昭の奨励と種痘の名手といわれた玄調の尽力により、水戸藩の種痘人口は安政はじめ（1850年代なかば）には１万3400人余にものぼりました。そして、この種痘の普及に大きな役割を果たしたのが、地方で活躍した郷医たちでした。

牛痘種続面附控（嘉永７年「太田村御用留」）

太田村（常陸太田市）で行われた牛痘種痘の記録です。嘉永７年(1854)６月から10月にかけて、60余人の小児が郷医から種痘の接種を受けています。このうち困窮者の22人には、この史料にみえるように一人につき銭１貫文が藩から支給され、種痘の普及が図られました。



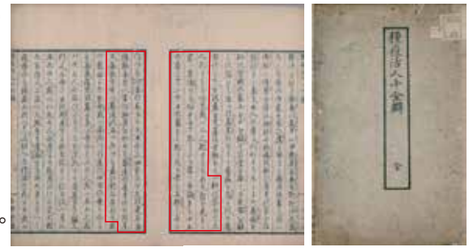
牛痘種続面附控
東上町
六月廿三日植　指物や　左七　娘　もし　三歳
一、銭壱貫文
六月廿三日植　もろう　国五郎　倅　福太郎　とし　弐歳
一、同壱貫文
六月廿三日植　番　兵蔵　娘　ゆき　とし　五歳
一、同壱貫文

「太田村御用留」常陸太田市教育委員会所蔵

本間玄調が見聞した痘瘡流行の惨状（『種痘活人十全弁』）

弘化４年(1847)12月の状況

「一軒の家にて三人死すもあり、或ハ二人死するもあり、死を免るゝ家ハ甚稀なり。幼少にて死したる者ハ勿論、多く十五、六歳より二十五、六歳にて死したる者も亦夥し。予が門へも訃音の来ること、日に三、四家に下らず。建具屋、指物屋等ハ常の細具をやめて、葬送の道具のミを造る。毎夜市中ハ葬送の五ツ六ツも並び行く事あり」



国立国会図書館デジタルコレクション

種痘の実施日程

弘化４年(1847)の痘瘡流行時からは、決まった日を種痘の日と定めました。

※城下から遠い地域では、郷医が医学館から種を受け取って実施しました。費用はすべて藩が負担しています。

毎月１日	医学館
５日	本間益軒宅・玄調宅
10日	本間益軒宅・玄調宅
15日	医学館
20日	本間益軒宅・玄調宅
25日	本間益軒宅・玄調宅

水戸藩での牛痘種痘のはじまり

水戸で最初の牛痘種痘は、嘉永3年(1850)1月に本間玄調が実施しました。玄調がはじめて接種したのは自身の六男で、痘苗は友人の仙台藩医大槻俊斎から送られたものです。藩としては、斉昭が薩摩藩主島津斉彬に依頼し、同年２月に長崎から送られてきた痘苗を医学館の松延道円が接種しています。

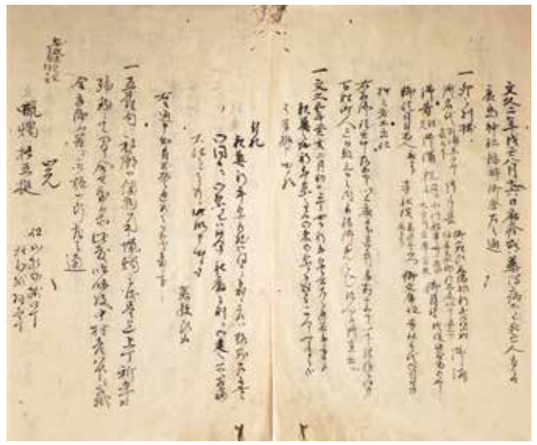
以後、医学館の医者が村々を巡り、各郷校などで接種を行いました。

コレラの大流行と予防への尽力

コレラは、コレラ菌の感染によって発症する伝染力の強い急性感染性腸炎です。日本では、江戸時代に大流行があり、「蕃痧病」「亜細亜霍乱」「コロリ病」などといわれ、たいへん恐れられていました。

安政５年(1858)7月に長崎で発生したコレラは江戸まで広がり、死者は３～４万人といわれています。やがてコレラの猛威は水戸にもおよび、万延元年(1860)まで流行が続き、多くの死者がでました。このような事態に対し、医学館の製薬方では、安政５年9月にコレラ「除御薬」を製剤し、村々の製薬取次者をとおして一軒に一包ずつ配布しました。また、安政６年には、「水府医学館」の名でコレラの予防法を示した「蕃痧病の手当并治方」という刷り物を配布しています。水戸の町々では、八幡宮などに祈祷をしたり、神輿をかついで防除の祈りをしたといいます。

また、文久２年(1862)夏頃には、コレラに加え麻疹（はしか）も流行し、弘道館内の鹿島神社では閏８月16日から18日にかけて疫病退散のための祭儀が執り行われた記録があります。



鹿島神社臨時御祭の記録
（「鹿島神社孔子廟行事書類」）

文久２年(1862)夏、江戸を中心に「文久の流行り病」といわれるコレラと麻疹（はしか）の大流行があり、その流行は水戸藩にもおよびました。水戸藩では、「御救」のために閏8月16日に静・吉田神社で流行病消除の祈祷、閏8月16日から18日まで弘道館内の鹿島神社で臨時御祭を執り行っています。鹿島神社の臨時御祭では、吉田神社宮司が祝詞を奏上し、藩士はもとより「百姓町人」まで3日間参拝することができました。

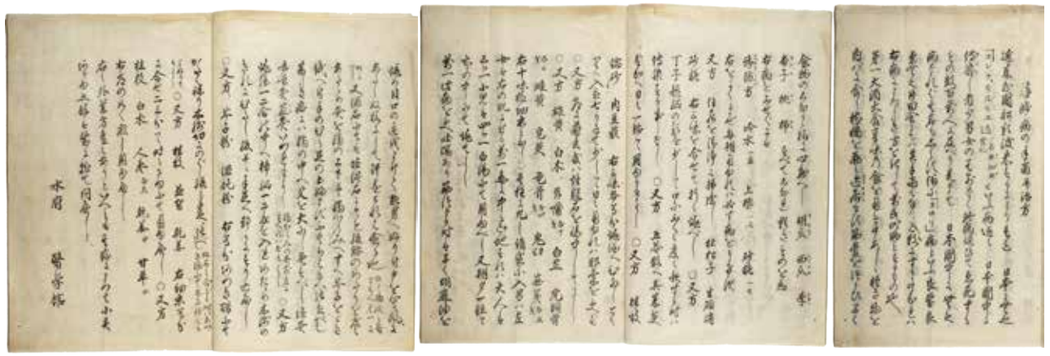
コレラ「薬方」の触

江戸でのコレラ大流行を知った斉昭は、安政５年 (1858) 9月に医学館製薬方にコレラ「除御薬」を製剤・配布させ、さらに自ら筆をとった予防のための「薬方」を配布させました。「薬方」は、この触にみえるように、梅干（烏梅）・山椒・白朮・赤小豆・黒豆・緑豆を炒って粉末にし、白湯または煎じて飲むというものです。斉昭の疫病流行に関する情報収集と予防に対する積極的な取り組みがわかります。

「太田村御用留」常陸太田市教育委員会所蔵

蕃痧病の手当并治方

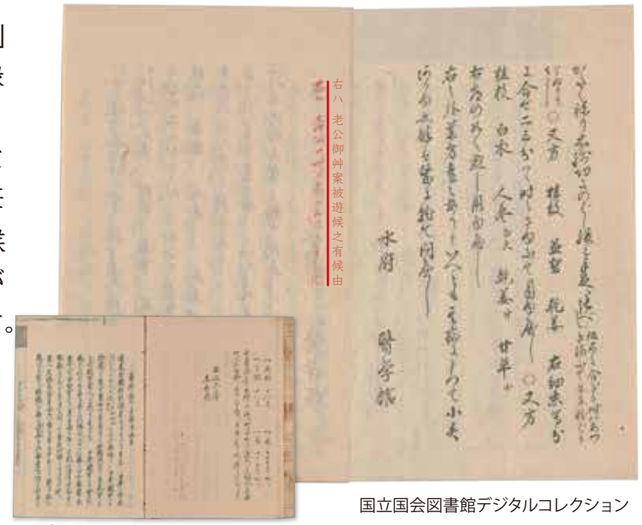
「蕃痧病の手当并治方」は、安政６年 (1859) に「水府医学館」の名で水戸藩特産の西ノ内和紙に印刷され、村々に配布されました。内容は、京都の医家新宮涼民らの「コレラ病論」（安政５年刊）などのコレラの専門書に拠るところが多く、独自のものではありませんが、斉昭が自ら草稿を作成したと伝わっています。うがいの奨励や油ものの摂取を控えることなど、予防医学に意を注いだ医学館の方針がよく示されています。



《大意》
蕃痧病の手当てと治し方
ちかごろ外国船などが来たことにより、これまで日本になかった「コレラ、モルヒュス」（またの名をアジア霍乱）という病気が国中に伝染し、老若男女の区別なくこの病に苦しみ急死する者が数百万人に及んでいる。俗に「コロリ」病と言われている。良い医者も薬もなく、片田舎では手当てもなく見殺しにすることになるので、この病気に良い対処法を記して多くの人々の助けとするものである。
第一に大酒や大食、脂っぽい食事をすることはよくない。できるだけ体を動かし、消化を良くするよう心掛けるべきである。胡瓜・西瓜・李・杏子・桃・柿は消化が悪いので避けること。
この病気を予防するには、冷水・酢・砂糖をよく混ぜ毎朝飲むこと。または、住居を清潔に掃除し、杜松子（香辛料）・生焔硝（硝石）・砂糖を合わせて時々焼くこと。または、五苓散（漢方薬）龍脳（香料）などでうがいをすること。または、丁子（香辛料）・に呉茱萸（生薬）を加え、毎日飲むのもよい。または、桂枝・縮砂・肉豆蔻（以上、生薬）を焼酎に七日以上つけたものを毎日飲むと邪気を受けない。または、常に麝香（香料、生薬）か鶏冠石（鉱物）を懐中するのもよい。または、雄黄（鉱物）・白朮・菖蒲・白芷・虎頭骨・雌黄・皂莢・竜骨・鬼臼・蕪☒（以上、生薬）を粉末にして丸め、絹袋に入れ、男は左、女は右の肌につけたり、少量を白湯で飲むこと。また、これを朝夕に一粒づつ家の中で焼いてもよい。
万一この病気に感染した時には、ごま油を温めて全身にぬり、戸を閉め汗をとれば癒える。また、温石などで腹や腰を温めたり、灸をへ、そのあたりにすえ、芥子を溶いて紙につけ手のひらや足に貼るとよい。重症の時は腹の中心にもぐさを大きくして灸をすること。または、焼酎に樟脳を入れ、温めて木綿の布にひたし、腹と手足にすり込むこと。または、芥子粉と饂飩粉を鍋でねり、木綿の布にのばして腹と手足に貼ること。または、桂枝・益智・乾姜（以上、生薬）を混ぜ、時々白湯で飲むこと。または、桂枝・白朮、人参・乾姜・甘草（生薬）を常に煎じて飲むとよい。
このほかに様々な薬方があるが、症状によって異なることがあるため、詳細は医者に確認をすること。
水府　医学館

南梁年録の記録

水戸藩の学者小宮山南梁の「南梁年録」は、幕末から明治にかけての日々の記録がつづられており、その中に配布された「蕃痧病の手当并治方」がそのまま綴じ込まれています。また、末尾には南梁自筆の朱書きで「右は老公ご草案あそばされ候これあり候よし（読み下し）」とあり、斉昭が草案（草稿）を作したことが記されています。



国立国会図書館デジタルコレクション

本間玄調の業績

水戸藩の医学者のなかでも、特に日本の医学界に大きな足跡をのこしたのは本間玄調です。玄調は、本間家５代玄琢が郷校稽医館を創設した文化元年(1804)に玄琢の女婿玄有の三男として生まれ、17歳の時に６代益軒の養子となりました。

棗軒先生像〔『内科秘録』より（京都大学附属図書館所蔵）〕

玄調は、益軒のすすめで江戸に出て水戸藩医の原南陽に師事します。その後、蘭方医学や儒学を学び、また、紀州の華岡青洲に入門し、麻酔薬による手術など外科の技術を習得しました。さらに長崎でシーボルトから種痘術などを学んでいます。

華岡先生像〔『青洲華岡先生遺教』より（京都大学附属図書館所蔵）〕

帰郷後、玄調は益軒のもとで医療活動をはじめます。天保14年(1843)には水戸藩の表医師となって医学館に携わり、安政６年(1859)からは侍医として医学館教授を兼ねました。

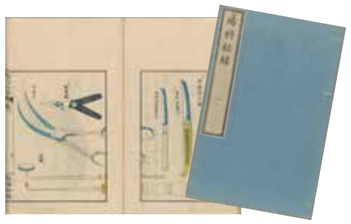
『シイボルト肖像』部分（国立国会図書館デジタルコレクション）

玄調の活動は、診療、医学教育、種痘の普及、著述など多方面にわたります。特に種痘の普及には心血を注ぎ、自著に自ら種痘を施した小児は3000人余と記しています。安政元年、玄調は斉昭から多くの人命を救ったとして「救」の名を賜りました。

本間玄調の著作

瘍科秘録

弘化４年(1847)刊、10巻。玄調の主著といわれ、20年にわたる外科治療の経験をまとめたもの。


『瘍科秘録』（神戸大学附属図書館所蔵）出典：国書データベース, https://doi.org/10.20730/100260988

脱疽患者に対する下肢切断、痔、乳癌、膀胱結石の摘出など、豊富な症例が掲載されています。『続瘍科秘録』５巻とともに、華岡流外科の大成者としての声価を高めました。

内科秘録

元治元年序、慶応3年の跋あり、14巻。玄調による内科の医療技術に関する著作で、病気の症状や治療法のほか、医師の倫理、内科総論、人体の解剖などが述べられています。また、種痘編の記述からは、種痘の普及に対する強い信念がうかがえます。

『内科秘録』（神戸大学附属図書館所蔵）出典：国書データベース, https://doi.org/10.20730/100261048

玄調が「救」の名を賜った際の斉昭書状

玄調は、安政元年(1854)に斉昭から「救」の名を賜りました。書状にあるように「多くの人命を救」い、「救」の名を賜ったことを玄調は光栄に感じていると自著に記しています。また、本間家には、「玄調が藤坂町の自宅から水戸城に向かう途中、大町で貧しい者が苦しんでいるのを見て、かごから降りて手当てをしたところ、それが評判となり救の名を賜った」という話が伝わっているそうです。

『続瘍科秘録』（京都大学附属図書館所蔵）

本間昭雄氏所蔵

本間玄調事
救（スクフ）
斉昭の花押（かおう）（サインのようなもの）

薄暑無障
被大悦候去ル辰年後暴
政をさけ国賊
頭ニ相成処近頃ハ老人ニて
不得已者候姦党
愚物之外大和魂之者ハ
追々惣髪改復
為　国家可賀候在国中
松延其方父石川
紋付肩衣遣候処其方
事も医術
格別故此度紋付肩衣
幷名遣し候末永く
相用療治出精
多救人命可申ものせ

正月十九日
本間救

〈意訳〉
初夏の少し蒸し暑さを感じるこの頃となったが、身体に障りなく過ごしているようで何よりだ。
去る辰の年（弘化元年）以後、暴政をさけるため、水戸藩の反逆者（国賊）の頭目となっているわが身なのだが（弘化元年に幕府から致仕・謹慎を命ぜられ、藩主の地位を追われたことを指す）、近頃はめっきり老人になってしまって、どうにもならぬ。
だが、悪だくみをする一派や愚か者（斉昭の改革政治に強硬に反対する一派の人々）ではない（正義の心を持つ）大和魂の者たち（斉昭の政治を支持する改革派の人々）が、徐々に惣髪となり服装も改まってきた（医師などが僧体を改め俗体になる）ことは、水戸藩にとっても喜ばしいことだ。
水戸に滞在中、松延年、そなたの父、及び石川□に紋付・肩衣を遣わしたのだが、この度医術に格別優れたそなたにも紋付・肩衣、さらに名前も遣わすことにする。末永くこの名前を用いて治療に精出し、多くの人命を救ってくれることを願っている。
（安政元）四月十九日　本間救へ

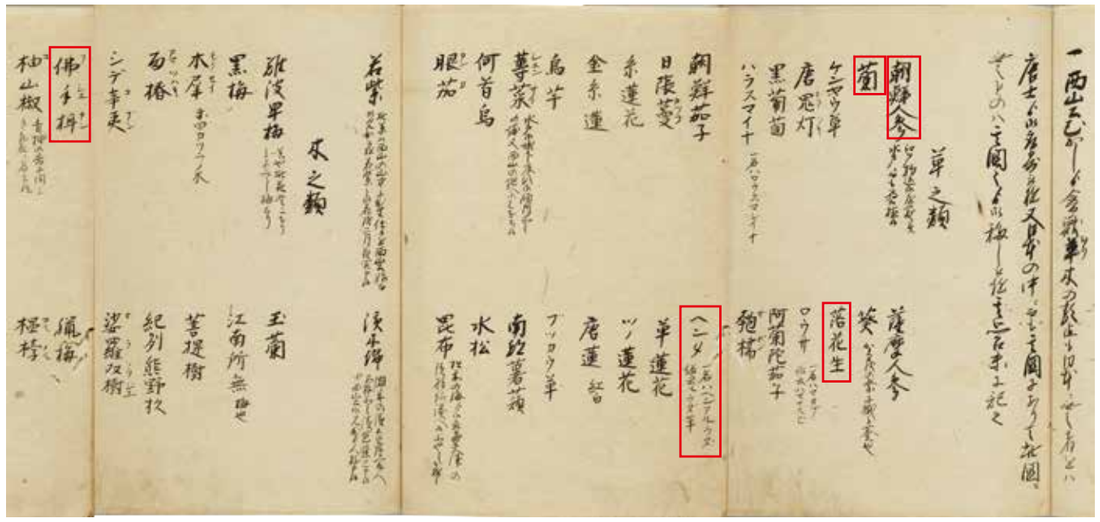
水戸藩の薬草

光圀の本草への関心

これまで医学館での製薬事業や、本草局長 佐藤中陵による「山海庶品」の編さんについてみてきましたが、ここでは2代藩主徳川光圀の本草への関心にはじまる水戸藩の本草学と薬草について紹介します。

さまざまな薬の処方を集めた「奇方西山集」を編さんした光圀は、薬草の研究にも熱心でした。光圀の伝記のひとつである「桃源遺事」には、「禽獣草木」(鳥獣や植物など命あるものすべて)の類まで、日本にないものは唐土(中国)から、水戸領にないものは他領から取り寄せていたことが記されています。そこには、朝鮮人参や蘭、落花生などのほか、インド原産の柑橘類「仏手柑(ブッシュカン)」や地中海沿岸地方原産のハーブ「ヘンルウタ(ヘンルーダ)」など珍しい植物も含まれています。

また、光圀の命で元禄6年(1693)に出版された『救民妙薬』の薬方は、ほとんどが水戸領内で採れる薬草を材料にしています。『救民妙薬』にみる薬草は、家庭療法として大切に用いられてきました。



『桃源遺事』(茨城大学図書館所蔵)をもとに合成
出典: 国書データベース, https://doi.org/10.20730/100305918

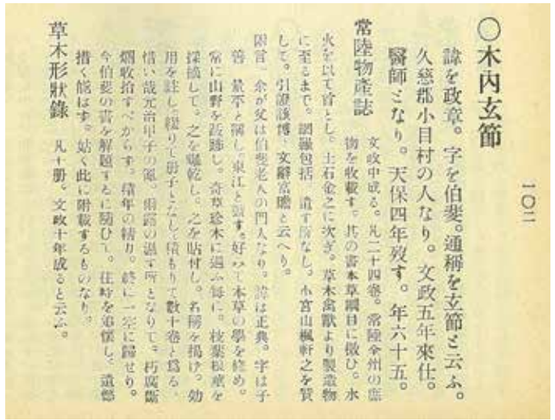
水戸藩の本草学

寛永年間(1624−1644)に明(中国)の李時珍の『本草綱目』が日本に伝わり、日本での本草学の研究が盛んになりました。日本本草学の発展には、小野蘭山や貝原益軒、平賀源内らが貢献しています。

水戸藩では、6代藩主治保が本草学に高い関心を示し、のちに医学館本草局長となる佐藤中陵や木内玄節ら本草学者の活動がみられるようになります。

木内玄節が文政元年(1818)に著した「常陸物産誌」は、水戸藩における最初の本草書です。明和6年(1769)に久慈郡小目村(常陸太田市)の代々医者を営む家に生まれた玄節は、15歳で藩医原南陽に入門し、郷医となった後、8代藩主斉脩の時代に藩医に抜擢されました。「常陸物産誌」24巻は、常陸地方に産する金石・草木・禽獣などを『本草綱目』の体裁にならって収録したもので、玄節の実地調査による成果も豊富に盛り込まれています。玄節には「草木形状録」10冊の著作もあり、その中で佐藤中陵の押葉の方法が紹介されています。また、小宮山楓軒が「常陸物産誌」「草木形状録」の序文や玄節の墓碑銘を記しており、両者の深い交流がうかがえます。

水戸藩の本草学は、その後、9代藩主斉昭のもとで、医学館本草局での「山海庶品」編さんや薬園での薬草栽培、製薬局での薬品研究へと進展していきました。



○木内玄節

諱を政章。字を伯斐。通稱を玄節と云ふ。久慈郡小目村の人なり。文政五年來仕。醫師となり。天保四年歿す。年六十五。

常陸物産誌　文政中成る。凡二十四卷。常陸全州の産物を收載す。其の書本草綱目に倣ひ。水火を以て首とし。土石金之に次ぎ。草木禽獣より製造物に至るまで。調査包括。遺す所なし。小宮山楓軒之を賞して。引證淵博。文辭富贍と云へり。

限言　余が父は伯斐老人の門人なり。詩は正典。字は子善。景平と稱し。東江と號す。好みて本草の學を修め。常に山野を跋渉し。奇草珍木に遇ふ毎に。枝葉根莖を採摘して。之を曝乾し。之を貼付し。名稱を揭げ。効用を註し。綴りて册子となし。積もりて數十卷となる。惜い哉。元治甲子の亂。烽燧の過ぐる所となりて。朽腐斷烟敗焰すべからず。積年の精力。終に一空に歸せり。今伯斐の書を解題するに勉ひて。往時を追懷し。遺響措く能はず。姑く此に附載するものなり。

草木形狀錄　凡十册。文政十年成ると云ふ。

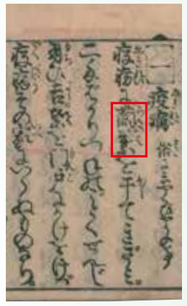
清水正健『増補・水戸の文籍』

『救民妙薬』にみる薬草

『救民妙薬』に記載されている薬方の材料のうち、主な薬草を紹介します。水戸市植物公園で実物を見ることができます。

水戸市植物公園刊行『「救民妙薬」の薬草』などより作成
※本書で紹介している薬草の使い方については、当時の史料に記載された情報に基づいており、現代での利用を紹介したものではありません。

蘭葉



一 疫癘に蘭葉を干てきざみ。二匁ばかりつねのごとくせんじ用い吉。葉を門戸にかけおけば疫病その家にいらぬものなり。

フジバカマ

生薬名
蘭草（らんそう）

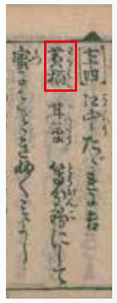
科名
キク科

効能
利尿、肩こり、皮膚のかゆみなど

薬用部位と成分
全草
クマリン誘導体など

疫癘（流行病・伝染病一般のこと）
疫癘には蘭葉を干してきざみ、二匁（約7g）を煮出して常飲するとよい。蘭葉を家の門にかけておけば疫病（疫癘）がその家に入る事がなくなるのである。

黄柏



七十四 口中ただれに吉
黄柏　甘草　等分粉にして蜜にてときふくみよし

キハダ

生薬名
黄柏（おうばく）

科名
ミカン科

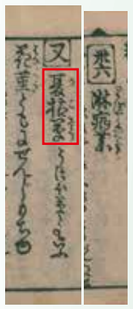
効能
胆汁分泌促進、抗菌作用など

薬用部位と成分
樹皮
アルカロイドなど

口の中のただれ（口内炎）によい（薬方）
黄柏　甘草を同量ずつ粉にして
はちみつで溶くと口に含みやすい。

乾燥した樹皮

夏枯草



廿六 淋病薬
又 夏枯草うつぼ草ともいふ花茎ともにせんじもちゆ

ウツボグサ

生薬名
夏枯草（かごそう）

科名
シソ科効能

利尿、消炎など

薬用部位と成分
花穂
トリテルペノイド、タンニンなど

淋病薬（ここでは排尿障害や尿意頻数等の自覚症状を示す）
（又は）夏枯草（うつぼ草ともいう）を
花も茎も煮出して飲用する。

つは

五 河豚に酔たるによし
又 つはふきのにたるものなり葉をとり。もみしぼり其汁を用いよし

ツワブキ

生薬名
橐吾（たくご）

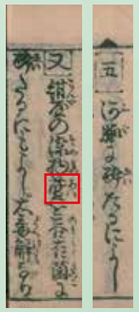
科名
キク科

効能
抗菌作用、健胃、食あたり、下痢など

薬用部位と成分
葉、根茎
ヘキセナール、タンニンなど

フグに酔った時（フグ中毒）によい（薬方）
ツワ（ブキ）フキの葉によく似ている植物である の葉を取って、
揉んで絞ると出てくる汁を飲むとよい。

藍



五 河豚に酔たるによし
又 紺屋の染物藍を呑吉菌に酔たるにもよし。大毒解なり

アイ

生薬名
藍葉（らんよう）

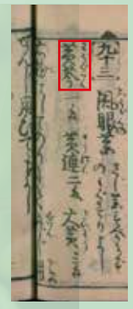
科名
タデ科

効能
解熱、解毒、毒虫さされ

薬用部位と成分
葉（ひげ根は焼いて除く）
インドール配糖体

フグの中毒によい
（又は）紺屋の藍（藍染用に藍玉を水で溶いた物か）を
飲むとよい。
キノコの毒にもよい。偉大な毒消しである。

黄芩



九十三 風眼薬
黄芩一匁 黄連二匁 大黄三匁
右粉にしてのりにて丸じ用せんじ用いてもよし

コガネバナ

生薬名
黄芩（おうごん）

科名
シソ科

効能
利尿、消炎、解熱、胆汁分泌促進など

薬用部位と成分
根
オーゴニン、バイカリンなど

風眼（膿漏眼）の薬直接点眼してはいけない飲み薬として使用するとよい
黄芩一匁（約4g）を黄連二匁（約8g）大黄三匁（約12g）
これらを粉にして糊（デンプン類）で丸薬にして使用する。
煮出して飲んでもよい。

葉紫花（はむらさき）

四十二 諸腫物薬
又 葉紫花 油を取て引て吉

ムラサキ

生薬名
紫根（しこん）

科名
ムラサキ科

効能
消炎、解熱、解毒など

薬用部位と成分
根
シコニンなど

様々な腫れものの薬
（又は）葉紫花の脂分を取って
患部に塗るとよい

山梔子（さんしし）

九十七 鼻血乃薬 山梔子黒焼
はなの中へふき入れよし

クチナシ

生薬名
山梔子（さんしし）

生薬名
アカネ科

効能
消炎、止血、解熱、鎮痛など

薬用部位と成分
果実
イリドイド配糖体など

果実（山梔子）

鼻血の薬
山梔子を焦げるまで焼き
鼻の中に吹き入れるとよい

黄連（おうれん）

九十二 やみ目薬 黄連煎じて渣を去上水にてさい〳〵洗い吉

オウレン

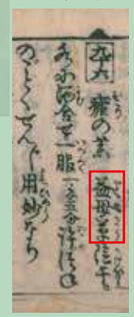
生薬名
黄連（おうれん）
科名
キンポウゲ科

効能
健胃、整腸、結膜炎など

薬用部位と成分
根茎（ひげ根は焼いて除く）
アルカロイドのペルベリン

やミ目薬（目の薬）
黄連を煮出してかすを取り、
残った汁で（目を）何度も洗うとよい。

益母草（やくもそう）



九十六 瘧の薬 益母草陰干。
水に酒合せ一服 一匁五分計つねのごとくせんじ用妙なり

メハジキ

生薬名
益母草（やくもそう）

科名
シソ科

効能
利尿、眩暈、婦人薬など

薬用部位と成分
全草、種子
ルチン、レオヌリンなど

おこり（間欠的な発熱・マラリアなど）の薬
益母草を陰干し、一匁五分（約5g）を水と酒を合せたものに加え、煮出して常時飲用するとすばらしい効果がある。

弘道館の閉館と医学館

弘道館は、天保12年(1841)の仮開館から16年後の安政4年(1857)に本開館しますが、その翌年、不時登城による斉昭の謹慎処分を発端に、学生の動揺と分裂が深刻な状況となりました。弘道館は藩内抗争の舞台となり、明治元年(1868)10月1日、最後の激戦といわれる弘道館の戦いが起こり、文館、武館、医学館などを焼失します。その後、藩内の行政組織改革によって学校組織が再編され、小規模ながら文館と武館が再建されました。

医学館は焼失後、明治3年2月から太田資春(丹波守)の元屋敷を普請して使用することになり、医療活動のほか、製薬と牛乳取り扱いなどの業務が継続されました。

弘道館の教育活動がようやく軌道に乗ろうとしていた矢先の明治5年8月、学制が発布され、弘道館は学校としての役割を終えました。同時に、天保14年(1843)の開設から29年間、医学教育や医療活動によって領民の生活と生命を支えた医学館も閉館となります。医学館の教職や、そのもとで学んだ藩医、町医、郷医の多くは、その後も、それぞれの地域で医療を担っていきました。

「水府家御屋敷割図」(茨城大学図書館所蔵)部分

明治期の医学館医者および職員

医学館から水戸藩に提出された明治3年(1870)2月時点での医学館医者および職員に関する報告には、本間玄調(救)をはじめとする医者や吏員、「牛飼使丁」が記されています。臨時の医学館においても、焼失前の医学館とほぼ同じ体制で医療や牛乳取り扱いなどの活動が継続されていたことがうかがえます。

「水戸大高氏記録」71 茨城大学附属図書館所蔵

医学館医者および職員一覧(「水戸大高氏記録」71 より作成)

姓	職	姓　名	役　職
本間　救	医　　正	熟祐庵（東京）	下等医師 酉午より3ヶ年の間西京仕業留主〈ママ〉)
関口秀南	〃		
楊朝兵衛	上等医師		
西村常雄	〃	楊　巻蔵	〃（医生助補）
庄司玄秀	〃	西宮静介	〃
村田隆介	〃	玉川立蔵	第 9 等医学館勤
小林元茂	〃	山田政太郎	第 10 等医学館属
本間貞佐	〃		吏取締
本橋元達（東京）	〃	武謹之助	第 10 等属吏
田中　安	中等医師	佐藤寅次郎	〃
本間高佐	〃（医生助補）	宮田徳三郎	〃
向坂泰蔵	〃	川又一太郎	属吏
清水雅彦	〃（医生助補）	成井秀蔵	同過
岡本元資	〃	増田登兵衛	〃
本間得四郎	〃	皆川金六	属吏弐季雇
萩谷太仲	〃	長谷川卯之吉	〃
土生栄庵	〃	医学館使丁	
振山城廻（東京）	〃	5 人	
西　秋雄（東京）	〃	同牛飼使丁	
大橋　清	〃	2 人	
		（うち 1 人は当座雇）	

鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』(422 頁)の表をもとに作成

おわりに

第1期は、「疫病との闘い－種痘とコレラ予防－」というテーマで、痘瘡(天然痘)やコレラの大流行から領民を救うために尽力した徳川斉昭や本間玄調らの姿をお伝えしています。4年近くにも及ぶコロナ禍を経験した私たちの生活と重ねながらご覧いただいたところもあったのではないでしょうか。

本間玄調(救)は、「医は術たり、ただ、これ一に仁のみ」(医とは術なのだが、その術は仁の心〔患者への思いやりの心〕にもとづくものであってこそ、真の術になるのだ)という言葉を子息に残しています。人の命を救いたいという仁の心は、徳川光圀や斉昭、原南陽、医学館の教職、藩医、そして多くの町医や郷医にも共通したものであったと思います。

ぜひ、弘道館で、その先人たちの仁の心に思いを馳せてみてください。

第2期は、「医学館の製薬事業と水戸藩の薬草」というテーマで、医学館の主要事業であった製薬事業と、その礎を築いた水戸藩の本草学や薬草について紹介しています。

2代藩主徳川光圀が領内で採れる薬草を材料とした薬方をまとめた『救民妙薬』に込めた思いは、9代藩主斉昭へと受け継がれ、医学館での薬草栽培と製薬事業として結実しました。そこからは、薬草や医薬によって領民の健康を守りたいという、光圀と斉昭の切実な願いが伝わってきます。

本展示をとおして、医学・医療が現代のように発達していなかった時代において、人々の生命や健康を守るために尽力した先人の心に思いを寄せていただけましたら幸いです。

《主な参考文献》本企画展には、主に次の文献等を参考にさせていただきました。『水戸市史　中巻(一)～(五)』(水戸市　1968～90 年刊)　『水戸藩史料　別記(下)』(吉川弘文館　1970 年刊)　大津勢津子『水戸藩の医学』(筑波書林　1990 年刊)　石島績『水戸烈公の医政と厚生運動　下巻』(日本衛生会　1943 年刊)　石島弘『水戸藩医学史』(ぺりかん社　1996 年刊)　瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』(山川出版社　1976 年刊)　瀬谷義彦『水戸の斉昭』(茨城新聞社　1979 年刊)　鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』(吉川弘文館　1987 年刊)　鈴木暎一『水戸弘道館小史』(文真堂　2003 年刊)　永井博『徳川斉昭』(山川出版社　2019 年刊)　大石学(編著)『徳川斉昭と水戸弘道館』(戎光祥出版　2022 年刊)　本間昭雄『水藩　本間家の人びと』(2011 年刊)　井坂教『小川稽医館』(筑波書林　1980 年刊)　『新修　日立市史　上巻』(日立市　1994 年刊)　『常陸太田市史　通史編　上巻』(常陸太田市　1984 年刊)　『小川町史　下巻』(小川町　1988 年刊)　『潮来町史』(潮来町　1996 年刊)　『那珂湊市史料　第 10 集』(那珂湊市　1987 年刊)　『御前山村郷土誌』(御前山村　1990 年刊)

本冊子は令和５年11月11日から令和６年６月３０日まで弘道館展示室にて行われた「医学館開設１８０年記念 水戸藩の医学と弘道館医学館」の展示内容を記録するためのものであり、出版・複製などの利用はお控えください。

「弘道館印」弘道館蔵書印を図案化しました。